昭和46年4月4日発行通巻4号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

4/4
220円

4

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

刊行のことば

1970年代の世界は，科学技術の異常な進歩と豊かな経済発展をとげた半面，人間の幸福とは何かを，あらためて問い直すことを余儀なくされています。この地球上の自然は，現代文明の生んだ公害のために破壊されようとし，動植物はかれらの生息する環境を失いつつあります。動物の一員である人類の運命もまた，この自然環境の崩壊に左右されるでしょう。

この時にあたって，失われようとしている自然と，危機に臨んでいる動物界を，いま一度ふりかえって，認識を新たにすることは，人類にとって無限の意義をもつものと信じます。

生きている動物界の実態を明らかにし，自然への親しみを呼びおこすことは，また人類の未来についての教訓ともなりましょう。

朝日新聞社が，フランスのラルース社と提携して「朝日＝ラルース　世界動物百科」を発刊するのは何よりもこのためであります。

本誌は現在この地球上に生きている動物の生態を，全世界から選んだもっとも美しいカラー写真でとらえながら，動物のなかでいちばん人間と縁の近い哺乳（ほにゅう）類，それも人間の〝親類〟であるサルからはじめ，鳥類，爬虫（はちゅう）類，両生類，魚類，昆虫（こんちゅう）を含む無脊椎（むせきつい）動物の順で紹介していきます。

内容は，高い学問的水準を保ちながら，青少年にも親しめる平易な表現で，生きた動物の姿を興味深く伝えることにつとめました。

とくに日本の読者のためには『私たちの仲間』のページを添えて〝動物週刊誌〟としての内容の充実をはかり，世界と日本の動物界のニュースや話題をおさめました。また日本の第一線動物学者の手により，カラーページを補完する解説と注をつけ，あるいは日本の動物についてのより詳細な紹介を行ないました。

本誌はアイウエオ順に並べるこれまでの〝引く百科〟の観念を大きく打破しました。192週にわたって楽しく読み進んでいくうちに，おのずから動物についての百科的知識が集積されていく〝読む百科〟として，いつまでも読者の皆さんに親しまれることを期待してやみません。

世界動物百科　第4号　4月4日

目次

表紙　PH. W. LUMMER

表3　**ギャラリー**　猿の画家　高階秀爾

監修　伊谷純一郎（京都大学理学部助教授）

翻訳　松木　繁（日本工業大学助教授）

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。

□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。

□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。

□人名，地名は，本人または原地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2―3　〒100　TEL 03―212―0131

朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3―3　〒530　TEL 06―231―0131

朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津　〒802　TEL 093―53―1131

朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1―3―3　〒460　TEL 052―231―8131

次号予告

3月31日発売



世界動物百科

5号　4／11

カラーページ

□テナガザル科
　フクロテナガザル
　ギンイロテナガザルまたはワウワウ
　フーロック
　シロテテナガザル

□オナガザル上科
　シロクロコロブス
　ハヌマンラングール
　テングザル

□オナガザル属

私たちの仲間

怪獣はなぜこわい
　爬虫類はなぜ無気味なのだろうか？
西サモアのサメ狩り
　輪釣りでサメを生けどる
ヒグマの子を求めての旅　畑　正憲
　ヒグマと2人のイノシシ　4
もうひとつの世界　3　グループ・5プラス1
　魚の目と魚眼レンズ
江藤　淳　四つの葡萄色の瞳　3
藤堂明保　漢字のふるさと　3
田中光常　動物写真のポイント　5
動物園のミッドナイト

私たちの仲間

4号………4月4日

トピックス

活躍する麻薬捜査犬

最近，麻薬の流行は世界的な風潮だが，イギリスでの蔓延(まんえん)はとくにひどい。

麻薬のルートが北アフリカ，アフガニスタン，パキスタンなどの生産地から，まわりまわって集中するのがロンドンになっていることもあって，麻薬中毒者の発生が激増している。

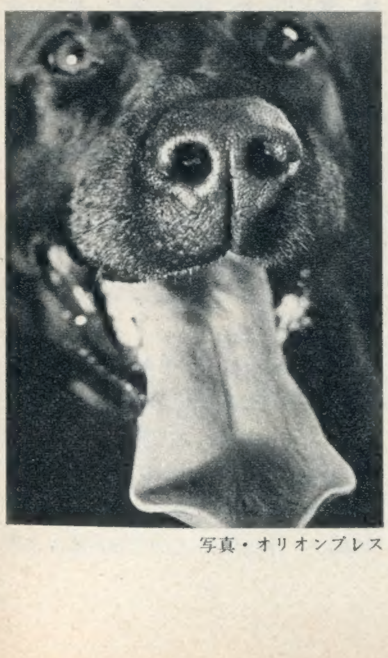
スコットランドヤードが摘発にやっきとなっているが，常用者や仲介者は巧妙に麻薬を隠すので，その発見はむずかしい。そこで考えられたのが，麻薬捜索専門の警察犬の訓練である。

イヌが人間より嗅覚(きゅうかく)がすぐれているのは知られているが，なかでもラブラドール犬の嗅覚は人間の40倍ちかいという。

そこでこのラブラドール犬を集めて6週間の特訓を施した。まず減食させて神経をとぎすませておいて，麻薬のにおいを覚えさせる。ついで類似のにおいとの相違から，いろいろのものに混合されたり，土のなか，水中など，あらゆる遮蔽(しゃへい)物の陰に隠された麻薬を捜しだす訓練が行なわれた。

メトロポリタン警察署がこの捜査犬を登用したところ，麻薬捜査の成果は1か月で約8倍に上がった。これらのイヌは室内にある麻薬なら，3分以内に必ず発見するという。■

（写真はロンドンで活躍する麻薬捜査犬）



写真・オリオンプレス

洞爺湖でエゾシカの生態調査

北海道・洞爺湖(とうや)に浮かぶ中島にも生息しているらしいという〝エゾシカ〟の社会が，はたして実在しているかどうか。2月の5日から，生態調査に出かけていた北海道大学理学部動物学教室のメンバーが，調査結果をまとめた。

調査は，毎日朝7時から夕方の5時まで，全島をくまなく歩きまわったが，シカの姿はついに見ることができなかったという。しかし，足跡は新雪の上にはっきりと残されており，さらにシカの通る〝シカ道〟まで発見したという。

これらから推定すると，シカは現在，最低5頭から多くて8頭が生息しているようだ。群れとしては4頭の親子連れが1つ，そして中島で生息しているシカのなかでは最大と思われる1頭が，つねに単独行動をとっていることがわかった。

さらに比較的若い中型のシカが2，3頭で群れをつくり，それぞれが独自の〝シカ道〟と行動範囲をもっている。

中島は周囲約10キロの大島を中心に，大小4つの島からなり，延べ面積は約4平方キロ。ここでシカはオンコ（イチイ）の芽，トクサ，ササ，その他の若木の皮などを食糧としている。

姿を見ることができなかったため，雌雄の比率，年齢などはわからなかったが，いままでは，頭数もまったくわからなかった〝シカ社会〟の構造がほぼ明らかにされたわけだ。

それにしても，群れをなす習性のあるシカのなかから，1頭だけで行動しているシカが見つかったということは，興味深い話だ。■

北限のサルはどうなる

青森営林局が昨年6月に行なった，下北半島の国有林除草剤散布により，大間町奥戸川上流域に生息する北限のサルが，えさ場を奪われて危機にひんしている，と日本モンキーセンター（愛知県犬山市）が緊急報告を出した。

これに対して青森営林局は，除草剤散布による影響はないと反論。さらにこれに地元の自然保護グループ，「あしの会」（代表・森治大間小教諭）が，サルのえさを奪ったのは薬剤散布だと決めつけた。

青森営林局が散布した除草剤は，ブラシキラー粒剤12トンである。その成分のなかには，アメリカ軍が一時ベトナムの枯れ葉作戦に使ったものもあり，アメリカ本国のネズミの生体実験に使ったところ，多くの奇形を生む疑いが出たため，使用を中止した薬である。

モンキーセンターの調査班は，12月に20日間現地調査を行ない，散布地域の周辺には，サルのえさである赤い実（ヤマブドウ，ガマズミ，マタタビ，ミヤマガマズミなど）がほとんどなく，冬の食糧保持があぶないと発表したのである。

営林局側は1月中旬の現地調査で，散布地域から1キロ周辺で赤い実をたくさん発見したと，実物を持ち帰って反論。さらに散布地域で葉っぱの枯れているのは，昨年8月16日の台風9号による塩害であるとし，大間地区のサルの健康状態は，きわめて良好と報告している。

これに「あしの会」がモンキーセンターを支持する発言をしたが，問題は危機説をめぐっての水かけ論ではなく，現実のサルをどう守っていくかであろう。

昨年11月に下北半島にすむサルとその生息北限地（脇野沢村と沢井村の一部）が天然記念物に指定され，国の保護を受けることになったが，指定区域外だからといって，大間町のサルを放っておいてよいということにはならないはずだ。■



写真・オリオンプレス

オカピの2世誕生

今年の2月，スイスのバーゼル動物園で，はじめてオカピが子を生んだ。

キリン科に属するオカピは，東部中央アフリカのセムリキ森林にだけ生息する動物で，現在はヨーロッパの動物園に，十数頭しかいない。

1901年，イギリスの動物学者シュレーター博士によって，新馬種として発表されたが，後にランケスター教授によってキリン科の1新属とされている。

腰と四肢（しし）に黒白の線斑(せんはん)があるのが特徴で，その姿はキリンというよりウマに近いが，性格は勇猛で人に向かってくることもあるという。

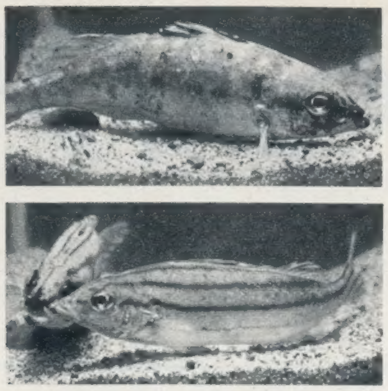
その血をひいているせいか，生まれた子もわずか2時間後には，自分の足で立ちあがり，母親の乳ぶさを吸いにいった。

日本では，残念ながらまだこの姿は見られない。■

（写真はバーゼル動物園のオカピの母子）



上は頭のあたりが脱皮しかかったカサゴの一種。下はこの脱皮した皮で，ウロコの跡をはっきり見ることができる。



上は脱皮中のヒメコトヒキ(全長12センチ)。下は脱皮後。しま模様もあざやかになった。

魚の脱皮

広崎芳次

偶然手に入れた奇妙な魚から
偶然めぐまれた貴重な脱皮片

赤く美しい色をした，見なれぬ形の魚のカラー写真を見せられた。カサゴの仲間と思われる。

海深くもぐっては，そこにすむ生きものたちのすばらしい写真をとっている，益田一氏が飼っている魚である。昭和46年1月15日伊東市のはずれにある伊豆海洋公園の前の水深50メートル，水温17℃のところで，1匹だけちょこなんと砂底に静座していたのを，つかまえてきたのだという。

この魚をありがたくいただくことにして，さっそく対面した。全長15センチほどの大きさなのに，頭が大きく頭長は6センチほどもあり，突きでた下あご，しゃくり上げられた顔，涙のあとのような2本の白い筋，たてがみのように高く連なった背びれ，大きな胸びれなどが目をひいた。

とりわけ，たてがみのような背びれの縁膜（とげととげの間の膜）が興味深かった。ふつうの魚ではひれの棘条（きょくじょう——かたいとげ）でも軟条（柔らかいとげ）でも，その先端まで縁膜でおおわれていることはまずない。

この魚のように先端まで縁膜でおおわれている魚として脳裏に浮かんだのは，脱皮をする魚として知られている南半球の海にすむアグリオプス *Agriopus* の仲間であった。しかしそれにしてもからだの形はまったく違うし，17℃という水温はサケのような冷水性の魚でも，チョウチョウウオのような温水性の魚でも生活できるだけに，この魚はいったいどこから来たのかということに対してさえも，判断のしようがなかった。

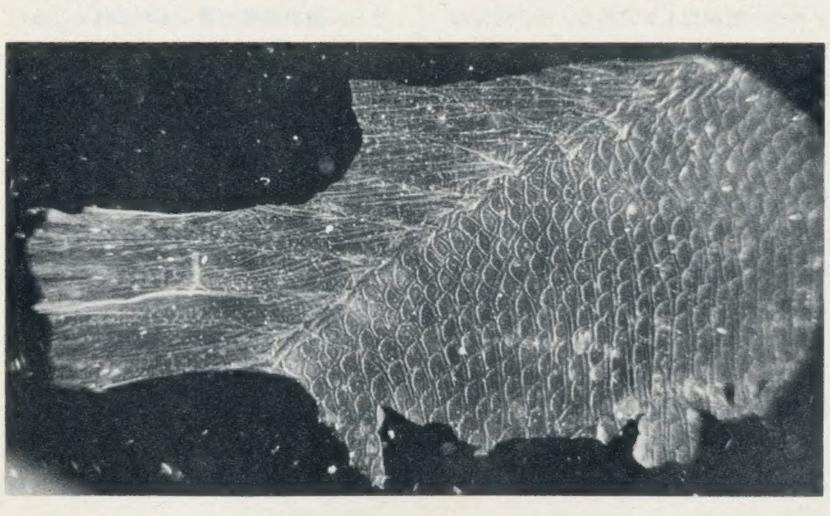
そして，捕えられてからまったく何も食べようとしないという。たいへんな難物をいただいたものだと思いながらも，江ノ島水族館の水槽（すいそう）に収容したのだが，翌日の1月31日に，水面に漂っている脱皮片を発見した。

前日にはまったくその徴候がなかったのにと魚の体表面をよく見ると，まだ脱ぎきれない表皮がたれ下がっていた。この脱皮片をみるとウロコのあと，棘条のあとなどがきれいに認められ，今までに認めたどの魚の脱皮片よりも，これらのあとが明瞭（めいりょう）であることに驚いた。

脱皮の現象は，1月31日につづいて2月13日に，再び全身にわたって見られた。

魚で脱皮をするものがあるということは，あまり知られていない事実であり，かたいウロコの上に，表皮が存在するということは，意外にさえ思われている。

しかし，魚のからだの生来の性質であるなめらかさは，表皮のなかにある特別な細胞と腺（せん）から，つねに多量に分泌（ぶんぴ）される粘液によるものであることを知れば，真皮からなるウロコの上に，表皮があることはうなずけるであろう。しかしこの表皮ははなはだ薄く，もろくて弱いので，表層の細胞はつねに消耗されて，下層で発達する新しい細胞と置き換えられていても，それが脱皮として人びとの目に触れるほどの形にならない。



少ない報告例

魚類の脱皮については，南アメリカ，南アフリカおよびオーストラリアなど南半球ではよく知られているアグリオプス属に関する報告があり，このような脱皮現象は世界的にみてもおそらく他に例のないものであろうとされている。このアグリオプス属の魚はわが国にはおらず，近縁のものとしてはハオコゼがこれに該当するが，背びれの基底部がウマのたてがみのような感じをいだかせるために，広く Horse-fish の名で呼ばれている。

Gilchrist 氏はこの魚を3年間も飼育し，その間に皮膚が魚の体表から離れ，あざやかな色彩の新皮に変わったことを目撃している。そしてかれは，脱皮した皮膚は多数の長い稜柱（りょうちゅう）からできており，これは表皮細胞が非常に長くかつ変形したものと思われること，この稜柱組織は哺乳（ほにゅう）動物のエナメル稜柱（歯のほうろう質をつくる細胞）に相当するものであることを明らかにした。

Heldt 氏はモンガラカワハギの仲間の1種が，捕えられて水槽に入れられただけで，おうおうにして脱皮の現象を起こしたことを報告している。

筆者は昭和29年以降，17年間にわたって海水魚，淡水魚あわせて500種以上の



新年は横浜の自宅で迎えた。

昭和46年。亥（いのしし）年である。忙しさにとりまぎれ，家の中は掃除も行き届かないままだったが，わが家の面々は浮き浮きしていた。

と同時に，ちょっぴり神経をとがらせて，隙（すき）あらば自分を売りこもうとしていた。皆，今度の計画の主要な地位につきたいと願っているのである。

だから，たとえば元日の朝，

「おめでとう隊長」

などと僕が言おうものなら大変である。全員が口を揃（そろ）えて，

「ハイッ」

と身を乗り出してきた。

人間誰しも，長とつく呼び名には弱いようである。そこで僕は，隊長という言葉を，6人のスタッフに公平にわけることにした。

隊長，名誉隊長，特別隊長，第1隊長，大隊長，真隊長 ——。最後のものは真実の隊長という意味で，もちろん僕が分捕ってしまった。

動物を家庭の中で飼うと，家族の性格が微妙に反映する。せっかちな人に飼われた動物はどことなく落ち着きがないし，隠居した老人に育てられた動物はおっとりしている。よく『イヌは飼主に似る』と言われたりするが，その通りだと思う。

そこで，ここらでわが親愛なるスタッフを紹介しておこう。なにしろこの物語はちょっとやそっとでは終わらないのだから，紙数にたっぷり余裕がある。

母，トキエ。61歳。

名誉隊長である。母の趣味は買物。朝，誰よりも先に新聞を開き，折込広告

ヒグマと2人のイノシシ 3

2人のイノシシと隊長たち

畑　正憲

をかき集めてショッピング情報を入手して，日に3回は出掛けて行く。そして，200円の品が120円などと書いてあろうものなら，それがさし当たって不要なベビー服であろうと構わずに買ってきて，

「今日は80円儲けました」

と相好を崩し，老眼鏡を掛けてその差額を手帳にメモする癖がある。だからそのコレクションは膨大なもので，そのまま北海道へ持って行けば，目玉商品をずらりと並べたスーパーマーケットが開けるだろう。母こそは，転職の際にぜひ必要となる貴重な隊員，いや隊長である。

弟，三喜雄。30歳。

特別隊長である彼は，ダンプやタクシーの運転手，プロボクサー，新聞や牛乳の配達，映画の照明係，等々の職業を転転として，最後に小動物の写真をとって口を糊するようになった。中学3年の時に柔道2段をとったスポーツマンで力持ち。死に瀕している動物を拾って育てる名人であり，現在は養豚家があきらめて捨てたブタをいつくしみ，同じ布団で眠っている。今回のカメラ担当である。

弟の奥方，三枝子。29歳。

第1隊長という称号には不満であるようだが，おっちょこちょいの割には料理が上手いそうだ。もっとも，しばしば調味料を入れ忘れるので，彼女の食卓に招待された人は，好みに応じて塩や砂糖を入れねばならない。

娘，明日美。10歳。

隊長である。僕の一粒種。

一人娘のせいだろうが，万事スローモーでよく転んですり傷を負う。そんな時，すぐ泣きべそをかくが，わが家に出入りする動物にやられた時には，下唇をじっと噛んで虚空をみつめる。わが家随一の読書家。

妻の純子は大隊長。昭和10年4月生まれで，僕より約10日だけ早くこの世に生をうけている。

昭和10年といえば，やはり亥年である。当然，僕たち夫婦は年男であり年女である。亥はいのしし。猪突猛進，猪武者などと，向こう見ずな行動をするといわれる華々しい動物である。僕は科学者だから，迷信や魔術を深く信じているうちに，干支こそは人類の命運を決する重大な発明だったと感嘆して今に至っている。

というのは他でもない。片仮名で書く動物学上のイノシシはともかく，古来日本人の空想の中に生き続けている亥は，とかく単細胞的で，考える前に突っ走る傾向を持っている。立木にぶつかって牙を突きさし，巨人につかまえられたと錯覚するのがいのししである。

それなら，まさに僕たち夫婦がそっくりではないか。

第一，中学2年生の時に，先は夫婦になると決め，そのまま突っ走って結婚するなんて，いのししでなければ出来ない業だ。しかも，結婚した時には1銭の収入もなく，それでも生活出来ると信じていたのだから。

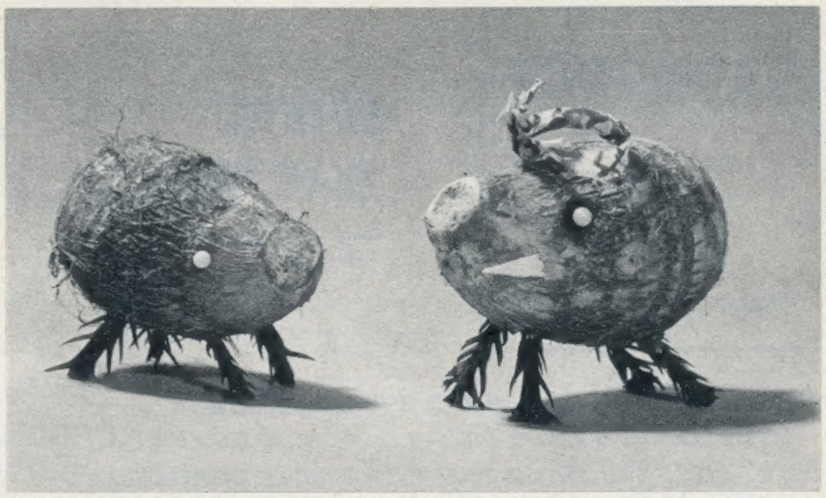
ヒグマを飼うについて，妻はこともなげにこう言った。

「ヒグマだって動物でしょ。動物ならなんとかなるわよ」

僕は一瞬あっけにとられ，

「そうだよなあ」

「そうよ。こうなれば何だっていいわ。ヒグマが済んだら，ニクソンを飼いましょうよ」



「だけどね，爬虫類研究所の高田栄一さんに訊いたら，ヒグマはクレージーだからなあ，と心配してたよ」

「だって……」

と妻は眼をクリクリさせ，

「あの方だって，クロヒョウをねらっているそうだわ。クロヒョウだって，成長するとクレージーだわ」

「だけど，誰かやるだろうね」

「絶対よ」

そうきっぱり言った後で，彼女はこう訊くのである。

「ところで，ヒグマってどの位大きくなるのかしら。ねえ，ヒグマの仔，毛はごわごわしてるかしら」

万事がこの調子である。いのししは無知を怖れない。目的がないことを怖れる。

大学院で僕が手がけたのは小さな動物である。その名もアメーバ。ゴマ粒よりもっと小さいものだった。

しかるに10年前社会に出てからは，サルをはじめとして大きな動物を手がけてきた。特に出産のメカニズムに魅せられ，子供を産ませては家に持って帰った。

それを育てるのは妻の役目である。結婚した時にはヘビどころか，ネコさえもさわれなかった妻が，いつの間にか，僕よりもすぐれた飼育人になった。

「ペットが嫌いだ，なんてよく言う人がいるでしょ。あれ，おかしいわよね。心をこめて飼ったら，かわいいわよ。人間の赤ちゃんを育てたことがあったら，この気持わかるはずだけど」

とは彼女の口癖である。

僕は，家族で動物を飼う楽しさはここにあると思う。たとえ相手が獣だとはいえ，注ぎこむものが違うのである。

たとえば数日前，わが家の愛猫の1匹が交通事故で死亡した。発見したのは夜だったが，見事に押しつぶされ，血へどを吐いて平たくなっていた。

それを見た妻は，涙をぽたぽた落として泣き，2日間眠らず，食事もしなかった。

こういう反応は僕にはない。愛していないわけでもないし，残像が残らないわけでもないが，2日間絶食したりはしない。

僕は近頃，この違いが大切だと思い始めた。家庭の中心で居座っている母親，すもうを取ったりキャッチボールをする父親。その異質なものが人間の子供ばかりか，動物の心にも影響を与えると思えてならぬ。

だから僕は，最も信頼出来る助手として妻を選んで連れていくのである。読者よ，そういうわけだから，2人のイノシシのおのろけが混じるかもしれないが辛抱して読んで下さい。■

魚類を飼育，観察してきているが，その間にいくつかの海水魚に脱皮の現象を認めている。

すなわちツバメウオ，トビハゼ，ミノカサゴ，ハナミノカサゴ，セトミノカサゴ，ダルマオコゼ，ハオコゼ，ホウボウおよびセミホウボウ，さらに今回のフサカサゴ科の1種の合計10種であり，ツバメウオ，トビハゼ以外はすべてカジカ目（もく）にふくまれている。外国における報告をみると Gilchrist 氏はアグリオプス属の3種が，Heldt 氏はモンガラ，カワハギ，フサカサゴ，セミホウボウのそれぞれの仲間各1種が脱皮したことを報告しているが，これらのうちカジカ目にふくまれていないものはモンガラカワハギのなかまの1種にすぎず，脱皮現象のみられる魚のほとんどは，カジカ目の魚であることがわかる。

脱皮のいろいろ

脱皮現象の認められた日本産魚類のうち，全体表の表皮がいっせいに脱皮するものと，部分的に不規則に脱皮するものとがあり，後者にはミノカサゴ類，ホウボウおよびセミホウボウがふくまれる。種類によって脱皮のようすが多少違う。

トビハゼの脱皮片はごく薄く透明であって，脱皮直後それを拾おうとしたが，ついに見失ってしまったほどである。

他の魚種ではこれほど薄いことはないが，表皮が一様にはがれ，相連なったままで脱落する例は少なく，ダルマオコゼやハオコゼなどに見られる程度で，他の多くは1～5平方センチの小片になってはがれるのがふつうである。

ペルシャ湾産のヒメコトヒキを21匹飼育したときには，かさぶたがはがれるように，ウロコがひとかたまりずつ脱げかわるのをしばしば認めた。

脱皮は季節に関係なく行なわれ，また健康状態，老若などとは無関係である。

脱皮に関連していえることは，脱皮寸前の魚の体色はくすんでいるのに対し，脱皮後の体色は鮮明となる傾向があり，とりわけハオコゼではこの傾向が強く，一見別種のごとき錯覚を起こさせるほどである。

これらの脱皮が，水槽内という特殊な環境の下だから起こるのではないかという疑問に対しては，かつて脱皮直前のハオコゼを海で捕え，天然でも行なわれていることを確かめた。

観察例がより多くなれば，魚の脱皮にも，いろいろな珍しいタイプが見つかるのではなかろうか。■　（江ノ島水族館）

もうひとつの世界

2

グループ・5プラス1

動物はなぜ〝動物〟になったか



アカボヤ（北海道産　体長10～12センチ）
海底の岩石，砂泥，藻などに付着して生活する〝植物的〟動物。　撮影　佐々木　崑

まず結論を先に言っておこう。それは〝えさ〟を食べるからである。

ではえさを食べない生物は，どうなったか？　それは，今われわれが見ているような植物になった。

植物たちの栄養源は，だれでも知っているとおり太陽の光エネルギーである。太陽からの光は，空から地上にまっすぐ降りそそぐ。光はものをある程度透過し，反射や屈折もするが，現実的にはその結果，たいへん弱まる。だから，栄養をたっぷりとるためには，植物のからだは表面積が大きいほどよいことになる。

しかし，植物は太陽光のエネルギーをそのまま使って生きるわけではない。だいいち，それではエネルギー転換の能力を誇りとする生物としての資格を欠く。植物でも動物でも，生物のからだはきわめて複雑ではあるが，とにかく，物質を基礎とする物質系なのであるから，光のエネルギーを化学的エネルギーに転換せねば，なんともならないわけである。

そこで，そのためのベースとして，水とか二酸化炭素が必要になる。後者は空気中から取りこむのが，もっとも早道である。その取りこみの効率は，やはり表面積に比例する。これは，光エネルギー取りこみのための必要条件と一致する。だから〝植物的生活〟のためには，まず第1に，からだが薄く平たくて，それが水平にひろがっているのがよいことになる。ところが前にも述べたとおり，空気はかわいている。そこへ空から強い太陽光が降りそそぐと，植物の表面はすぐに干からびてしまうだろう。表面には何かおおいをそなえておかねばならない。

では二酸化炭素をどこから取りこむべきだろうか？　表面のおおいにポツポツと穴をあけて……というわけにはいかない。せっかくおおいをつけた意味がなくなってしまう。そこで，二酸化炭素は葉の裏から吸収することになる。そのためには，からだを地上から離して，空中に持ちあげねばなるまい。

ところが，水は空気中には期待できない。空気中の湿気をどんどん吸い取れるほど穴だらけだったら，湿気を取りこむどころか，体内の水が逃げていって日干しになるのが関の山だろう。水生の藻類ならいざ知らず，陸上植物は水を地中から吸いあげるほかなかった。

そこで，ジレンマが生じる。エネルギーと二酸化炭素の吸収部位はなるべく高い空中に，水の吸収部位は地中深く……そこでじょうぶな茎がどうしても必要となり，同時に支持を容易にするために，平たいエネルギー吸収部位は，多数の細かい部分，すなわち葉に分割された。

こうして，根，茎，葉，そして固着生活という，いわゆる〝植物〟らしい形ができあがったのである。

では，本番の動物についてはどうだろうか？　われわれ自身が動物だから，これは比較的わかりやすい。

えさとか食物というのは何かなどと，ふだんはあまり詮索しないけれど，定義してみれば，それはつまり，できあいの，そして多くの場合，ある大きさのかたまりとなった有機物をさしている。水のことをえさとか食物という人はいまい。

できあいの有機物は，生物のからだそのものか，少なくともその産物である。動物のふんを食物としている昆虫（こんちゅう）もたくさんいるが，これはまさに動物の生みだしたものにほかならない。

ところで当然ながら，生物ないしその産物は，太陽の光のように，いつもあまねく存在しているわけではない。1つの場所では必ず限りがあり，食べつくしたらほかを捜さねばならぬ。そこで動きまわる能力が必要とされたということは，どこにでも書いてあるとおりである。

そして，できあいの有機物を食べて，その化学的エネルギーを利用するという形式から，消化器官が必要不可欠なものとなった。

けれどそれとともに，1つの重要な変化が起こった。それは，太陽の光が，もはやエネルギー源としてではなく，情報としての意味をもつようになったということである。

イギリスの生物学者ジュリアン・ハックスリーは，こういうことをいっている――〝地球上には，かつて光というものはなかった。それはある波長帯を占める電磁波の一部であるにすぎなかった。しかし，動物が目というものをもったとき，この波長帯の電磁波が，まさに光になったのである〟と。

それとともに，光のみならず，音やにおいもみな感覚情報として利用されるようになった。植物ももちろん，こういう情報を使っている。しかし，生活におけるその重要さの度合いとはくらべものにならない。

忘れてならぬことは，動物にも一見〝植物的〟な形のものがたくさんあることである。カイメン，ホヤ，コケムシ，その他，いわゆる下等動物に，そのようなものが多い。かれらの多くは，いわゆるフィルター・フィーダー（濾過摂食者）で，水を大量に飲み込んでは，そのなかのプランクトンをこし分けて食べている。だから，陸上にはこういう動物はいない。しかし，これらの動物もふくめて，どんな動物においても，みな摂食によって得るエネルギーと，それを捜すための運動エネルギーとの収支はつり合っている。その具体例は，これからたくさん見ることができよう。■　（Q）

四つの葡萄色の瞳　2

デザインちがい

江藤　淳

アニイが来るという晩，私は宴会を早目に切り上げて，ワクワクしながら家に戻って来た。家といってもマンション住いだから，本当はイヌを飼ってはいけないのだが，そんなことにかまってはいられない。だいいち，私には，もともと〝イヌを飼う〟という意識がまるでないのだ。〝イヌと一緒に暮らす〟とでもいったほうが，よほど実状に即しているのである。

アニイはすでに連れて来られていた。それは本当にちっちゃなやつだった。ダーキイが来たときは，生後2か月と少しばかりで，バスケットのなかから，ビックリ箱の仕込みのようにヒョイと顔を出したものだったが，アニイはなにしろまだ1か月半である。私がオーストラリアに旅行したとき，お土産に持って帰ったコアラ熊とならべてみると，ちょうど同じくらいの大きさしかない。そのコアラ熊にじゃれかかって，アニイは自分のほうからひっくりかえり，「キューン」とひと声啼いた。

仔イヌの腹というものは，白くて，柔らかいうぶ毛におおわれていて，なんともまあ可愛らしいものである。そこに小さなお乳が，おしるしばかり，といった様子で2列にならんでいる。久しぶりで，暖かい感情が心を充たしはじめるのを感じながら，その腹を撫でてみて，私はオヤと手を止めた。

「こりゃ，デザインがちがうじゃないか」

すると家内がいった。

「そうなのよ。この子のは互いちがいじゃなくて，一対ずつならんでるのよ」

「ふーん，神様がデザインを変えたのかなあ」私はしきりに感じ入った。

互いちがいとか，一対とかいうのは，お乳の並びかたのことである。ダーキイのは全部で7つで，あたかもダッフル・コートのフックのように，交互についていた。ところが，このアニイのは全部で8つもあり，ロシア兵の外套のボタンのように対称形にならんでいるのだ。私が好奇心にかられて，その辺をいじくりまわしても，オモチャの縫いぐるみのようなアニイのやつは，わりあいにおっとりしていて，なすがままになっている。その点ダーキイはひどく神経質で，身体をいじられるのを嫌ったものだった。

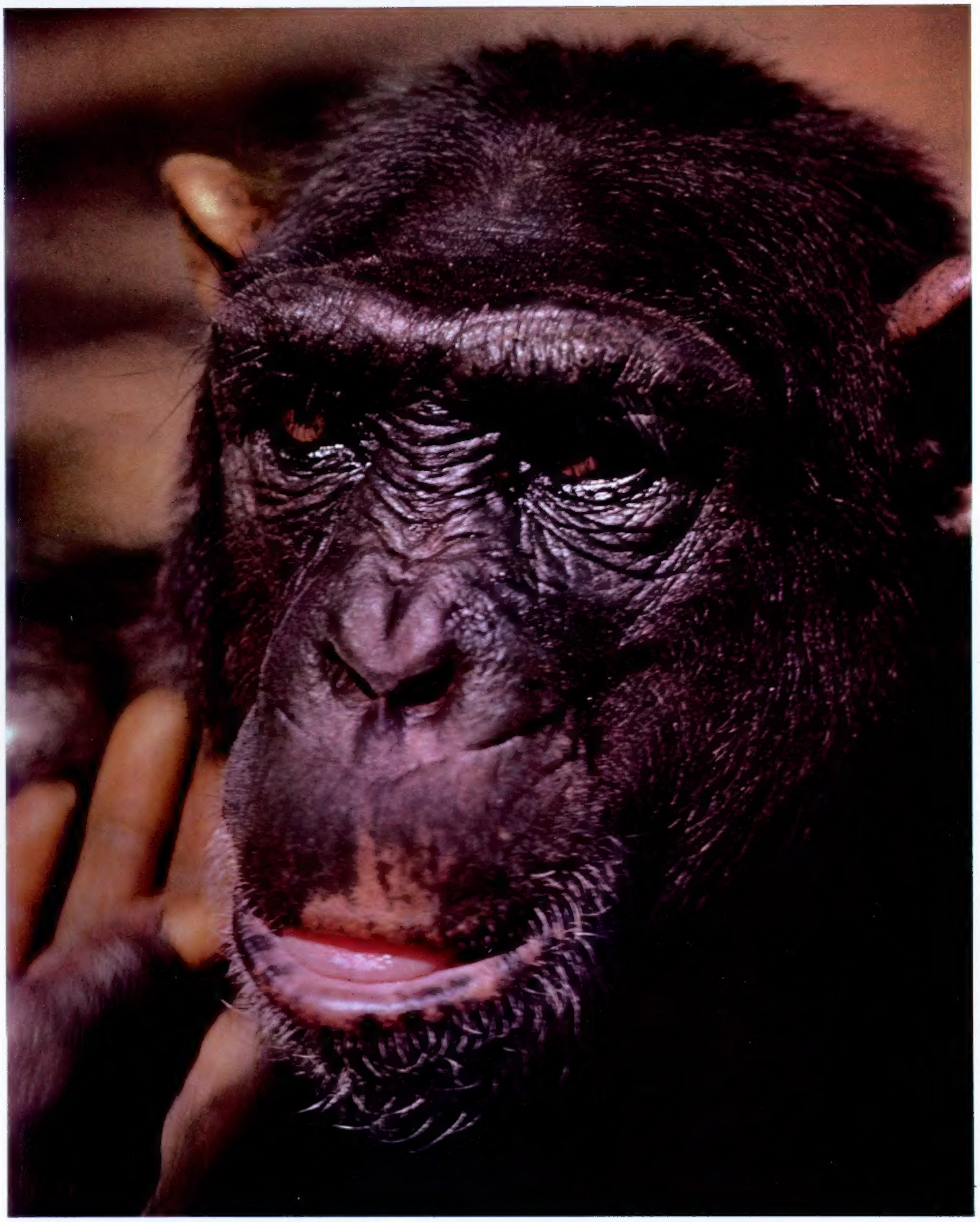
いいかげんにいじくりまわして，はなしてやると，アニイはまだ覚束ない足どりで，ヨチヨチと玄関のほうに行きかける。まだ母親が恋しいのかな，と思って様子をうかがっていると，玄関わきのバス・ルームのドアが半開きになっているのをすりぬけて，バス・タブに身をすりつけるように，タイルのつめたい固い床の上に寝た。

「どうした。固いところが好きなのかい？」と声をかけてやったら，キョトンとした顔で私を見上げている。薄暗いバス・ルームのなかで，その瞳がアメシストのような緑色に輝いた。そして差しのばした私の指を，アニイは軽く嚙みながら乳首を吸うように吸った。■

チンパンジー
Pan troglodytes

チンパンジーは1種しかいない〔注1〕。ゴリラよりも小さく，胴体は，ゴリラにくらべるともっとずんぐりしている。R.アルトマンの述べているところによると，おとなの雄が立ったときの身長は1.30～1.60メートル，大きい雌で1.30メートルである。雄の頭蓋(ずがい)には，ゴリラの特徴である矢状隆起(しじょうりゅうき)〔注2〕がない。脳の容積を，体重100キロに対して換算してみると，ヒトの場合は2380立方センチ，テナガザルが1580，チンパンジーが760，オランウータンが640，ゴリラが340である。

体幹部（胴体）の骨格は，全体としてみると，ゴリラほどがんじょうではない。チンパンジーの骨格は，いくつかのはっきりした特徴をのぞくと，ヒトの骨格によく似ている。とりわけ骨盤のつくりはよく似ている。ヒトと血液反応が似ているか，ヒトと睾丸（こうがん）の移植ができるか，大脳のしわが似ているかどうかによって，ヒトとの類縁関係の程度がわかる。またチンパンジーの脳には，ヒトの言語中枢，つまりブローカの中枢〔注3〕のかすかな痕跡がみられる。



チンパンジーの多くの亜種のうちには
こんな黒い顔をしたものもいる。
ゴリラにそっくりなので
ときどき，まちがえられる。

PH. FIEVET

からだの特徴と生活習慣

チンパンジーの顔つきは，ゴリラの顔よりはあいそがよい。明るい茶色の虹彩（こうさい）のあるその大きな目は，澄んでいて表情豊かなまなざしをもっている。2本の縦の筋が通っている平べったい鼻には，薄い鼻中隔(びちゅうかく)と狭い鼻孔がある。ラッパのように長く突きだせるくちびるは，よく動く。耳はゴリラの耳よりも大きく，ヒトの耳よりもゴリラのほうに似ている。

おとなになった雄は，肩幅が広く，胴はたるのようにどっしりとし，胸には実によく筋肉がついていて，少し盛りあがっている。腕は非常に長く，ひざの下まで達しているが，ゴリラの腕ほどたくましくはない。太くて，がんじょうで，ざらざらした指は，非常に長く，そして指の基節―第1指骨―の半ばあたりまで，膜で結びつけられている。親指は短く，細く，中指がいちばん長い。脚(あし)にはふくらはぎがなく，平たい足には，長くて太い親指がついているが，他の足指からはっきりと離れている。足の裏は扁平でざらざらしていて，細長い。かかとはあまり発達していず，足のつめは暗いかっ色か黒で，せむしの背のように丸くなっている。

チンパンジーのからだは，柔らかくて，ちぢれていない毛でおおわれている。その毛はふつうは黒いが，ときには茶色の光沢をもっている。チンパンジーは四肢（しし）で歩行し，手は握りこぶしをつくってその背面を土につくので，指の背面には歩きだこがいっぱいできている。長い間まっすぐに二足で立ってはいられないので，地面に手をついてからだをささえる癖があるのである。

今日この種は，アフリカ中・西部の赤道直下の大森林にすんでいる。サベージはこの類人猿の習性についてこう語っている。

「この動物は社会生活を営んでいるとはいえない。5頭以上いっしょにいることは珍しく，10頭以上のことはまずない。しかし，かれらは遊びたいときにはもっとたくさんで群れをつくることもある〔注4〕。かれらは，木のあまり高くないところにある，がんじょうなふたまたの枝の上に，木の葉と小枝を組み合わ



ゴリラは，幼い日々を
家族的集団の一員として過ごす。
この集団生活のなかで
ゴリラは，少しずつ利口になる。（左）

PH. W. LUMMER

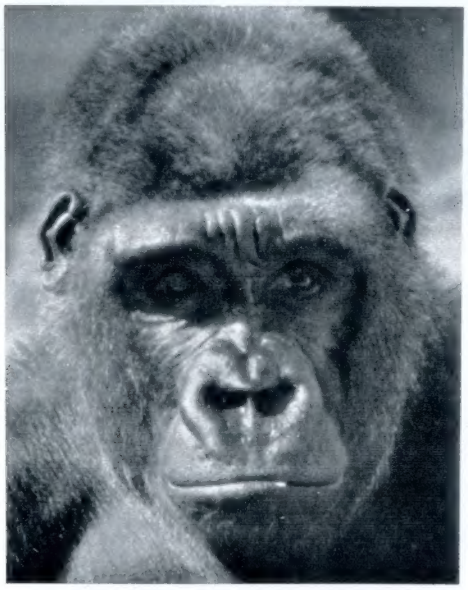
せて巣をつくる。この巣は地上８メートルから10メートル，または12メートルくらいの高さに達することさえある。ある巣などは，地上13メートル以上のところにあった」

チンパンジーは，人目につくところには巣をつくらない。かれらはまわりの事情，ことに食物を捜すのにつごうのよいような状況に従って遊動域を変える。山岳地帯のほうがチンパンジーを見かけることが多いが，それはおそらく，原住民に耕された平地部は植林も少なく，巣をつくるのに使う木がないということで説明がつく。ふつう１本の木には，１つの巣しかつくらない。せいぜい多くても２つで，この場合はたがいにじゅうぶんの距離をとっている。１本の木に５つの巣がつくってある，といった例もないわけではない。

野生のチンパンジーは休むときだけすわる。そうでないときは，立っているか歩いている。もし自分が見られているのに気がつくと，四つんばいですばやく逃げる。チンパンジーはすぐれた木登りの名手であるが，驚くほどすばやく木から木へとび移る。チンパンジーはゴリラと同じように，マメなどの堅い実や，水っぽいくだもの，木の芽，それからおそらくは木の根も食べている〔注５〕。ときには危険をおかして，バナナの木や，原住民がトウモロコシ畑のまん中に植えた果樹に登ったり，パパイヤのなっている，人の住まなくなった村にはいっていったりする。ある地域にじゅうぶんな食物がなくなると，チンパンジーは移動する。

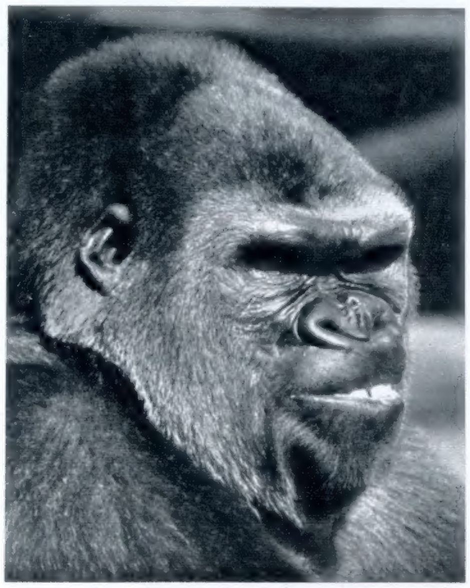
チンパンジーは鋭敏な知能に恵まれていて，ことに子どもに対する愛情は深い。子が生まれるとすぐに，じっと見つめて愛情を注ぐ。それは一般に母親であるが，もしその母親が死んでしまったり，赤ん坊のめんどうをみなかったり，養えないことがわかると，生まれたばかりの赤ん坊は，母親にかわる雄か雌に愛着をもつようになる。チンパンジーをならしたり仕込んだりするのには，ごく幼いうちに捕えたほうがよい，というのはこうしたわけである。

パリ東南の近代的設備で有名なバンセンヌ動物園には，１頭の雌チンパンジーがいた。前の飼い主がおもしろ半分に酒を飲ませていたので，完全にアルコール中毒になっていて，哀れにも自分が生んだ赤ん坊の世話をすることができなかった。そこで赤ん坊は飼育係に預けられた。この赤ん坊はその人に，実によ



これら表情たっぷりな
ゴリラの３枚の写真を見れば
ゴリラがいかに周囲のものに興味を示し
好奇心の強い動物であるかがわかるであろう。

PH. ZOO DE BARCELONE



数ある動物の種のなかには
色素の足りない白子のものがいる。
これはスペインのバルセロナ動物園にいる
世界で最初の白いゴリラである。（右上）

PH. RUSS KINNE, BAVARIA-HADELER, OKAPIA



生けどったかわいいゴリラの赤ん坊も
かつてはなかなか育たなかった。
今では，自然に近い生活条件が考えられて
動物園でも，飼育できるばかりか
繁殖も可能になった。（右下）

PH. P. POPPER





4 – 3



くなついて，決して離れなかった。飼育係は，かれを左足にしがみつかせたまま歩いていた。足にしがみついたままの小さなチンパンジーといっしょに，この飼育係が《サル小屋》やそのまわりを掃除している姿を見るのは，まことに奇妙な光景だった。

このような刷り込みといわれる現象〔注 6〕は，ドイツのコンラッド・ローレンツ教授によって研究され，その成果は18世紀フランスの博物学者であるビュフォンが残してくれた知識を，さらに一新したのであった。

チンパンジーは，自分の身を守るためには人と猛烈な格闘もする。つかまりそうになると，力強い腕で敵のからだを締めつけ，がんじょうな歯でかみついて猛烈に抵抗する。

おとなのチンパンジーの犬歯はきわだって発達しているので，肉も食べるように思われよう。しかし，チンパンジーで肉を食べるのは人間に飼われたものだけである〔注 5〕。したがってチンパンジーの犬歯は，身を防ぐ役割だけをもっていて，危険が迫ったときにはいつも犬歯を使う。

豊かな感情表現力

チンパンジーは，類人猿のなかでは，生まれたところから遠く離れた新しい土地に，いちばんよく適応できる。長い間チンパンジーを観察していると，チンパンジーは動物として扱われるよりも，むしろ人間として扱われるべきであるといいたくなる。

その性格や行動の特徴は，ヒトと非常によく似ているので，この連中が，けものだということを忘れてしまうくらいである。外観はたしかに動物だが，その知能は人間の幼児の知能に匹敵する。チンパンジーが，人間の助けをかりずに問題を解けるということは，あるいくつかの実験で証明されている。チンパンジーを部屋に入れて，手の届かない高い天井からバナナのふさをつり下げ，部屋の中に箱を２つ入れてやると，何分か考えて，２つの箱を重ね，その上にあがってバナナを取ることを思いつく。

もう１つ，ベルタン教授から報告された次のような実験がある。

「一方の自動販売器は，札を入れるとそのたびにブドウの実が出てくる。もう一方の自動販売器は，レバーを動かすと札が出てくる。チンパンジーはすぐにこの器械の使い方を覚えてしまう。つまり一方の器械から札を出し，それをもう１つの器械に入れてブドウを手に入れる〔注 7〕。さらに器械の使い方を，次のように複雑にする。ブドウを出す器械がブドウを出している間は，札を出す器械は札を出さないようにしておく。またこの逆でもよい。そうするとチンパンジーは，札の器械のところへいって，札は札で全部出してしまって自分で持っている。そしてブドウを出す器械が動き始めるまで，必要ならば何時間でも待っている」

チンパンジーは，おとなのまねをしようとする子どものように，たいへん物まねがうまい。いろいろな忠告は快く聞き入れて，それをすぐ覚えてしまう。いつも何かに気をとられているチンパンジーだが，成功確実という確信がないかぎり，決してそれをやろうとはしないので，その行動は非常に慎重であり，よく考えてから行動しているようにみえる。

かれらは，ことばは使わなくとも人がいったことはわかるし，また人に理解させることもできる〔注 7〕。自分が何を望んでいるかということを，非常にはっきりと表明するのには，わずかな音節と，正確に定まった一連の音声だけでじゅうぶんである。人間のほうが利口だということを知っているかのように，チンパンジーは人間に服従する。しかし他の動物，とくに他種のサルに対しては，自分のほうがすぐれているということを，じゅうぶんに意識しているようにふるまう。チンパンジーは，人間のおとなと子どもを見分ける。

ものを覚えようとする意欲が，異常に強く，いろいろなできごとを筋道たてて理解したり，あらゆる新しい経験を生かすことを知っている。自分の欲望を実現するのには慎重で，ずるくて，ねばり強いが，強情ではない。気分は変わりやすい。きょうは陽気で楽しそうでも，あすは寂しそうでおこりっぽくなる。そしてふざけるのが大好きだ。チンパンジーが愉快だという気持を表わすのは，微笑ではなくて一種の高笑いである。また苦痛のときは，身ぶりや訴えるような叫び声を出すのですぐに理解できるが，それはまるで人間そっくりの声である。悲しいときは，絶望したかのように大地をころげまわり，手足で自分のからだをたたき，毛をかきむしる。自分を親切に扱ってくれる相手にはよくなつき，そうでない相手には無礼な態度をとる。他のサルも，このような表現能力をもってはいるが，チンパンジーほどはっきりと，ニュアンス豊かに，まるで人間のように自分を表わすことは，まずないのである。

ブロッティの生活誌

こうしてチンパンジーの主要な特性を書き並べていると，研究対象として長い間飼育された，あのチンパンジーのことを思いださずにはいられない。そのチンパンジーはいとも哀れな状態でヨーロッパに着いたのだった。心身ともに病んでいて，まるで人の子と同じように注意してめんどうをみなければならなかった。すぐれた獣医のセデルが世話をしてくれた。子どもが母親になつくように，チンパンジーがその保護者になついたということだけで驚いてはいけない。このチンパンジーは，セデルのどんな命令にも盲目的に従うのであった。ひとたび元気になると，かれは快活になり疲れを知らぬ活発さを示した。

何もすることがないと，自分の足のうらを手でたたいていた。チンパンジーは，歩いているときはぎごちなく無器用だが，それ以外の

チンパンジーは，表現力が豊かで
ありとあらゆる身ぶりをする。
この幼いチンパンジーの
指をくわえた表情は
次のいたずらを考えているようだ。

PH. DEVEZ-MISSION BIOLOGIQUE DU GABON

この森のいたずらっこグループは
チンパンジーの１亜種である
チェゴチンパンジーで
カメルーン，ガボンなどにすむ。（右）

運動はとてもうまい。他の類人猿のようにふだんは四つ足で立ち，わずかに前傾した姿勢で動きまわる。ものを運ぶときはほとんど直立の姿勢で，片手を地について身をささえ，すばやく前進する。二本足で歩くのは例外である。歩くより，もっと敏しょうさを示すのはよじ登るときで，動物というよりむしろ人のような登り方をする。枝に腕をひっかけてはずみをつけ，きわめて長い距離をとんでいく。足を使ってもとぶが，それは確実にとべるというときだけである。

このチンパンジーは，飼い主の友だちを見分けることができ，自分に親切な人たちにはすなおであった。そして家族の者にとけこんで，部屋から部屋へと自由に歩きまわるのがうれしいようだった。自分のやったことが，うまく人に受け入れられたとわかると，うれしそうに手をたたき，そしてまた別の人のやったおもしろいことに，自分も拍手のできるところを見せていた。

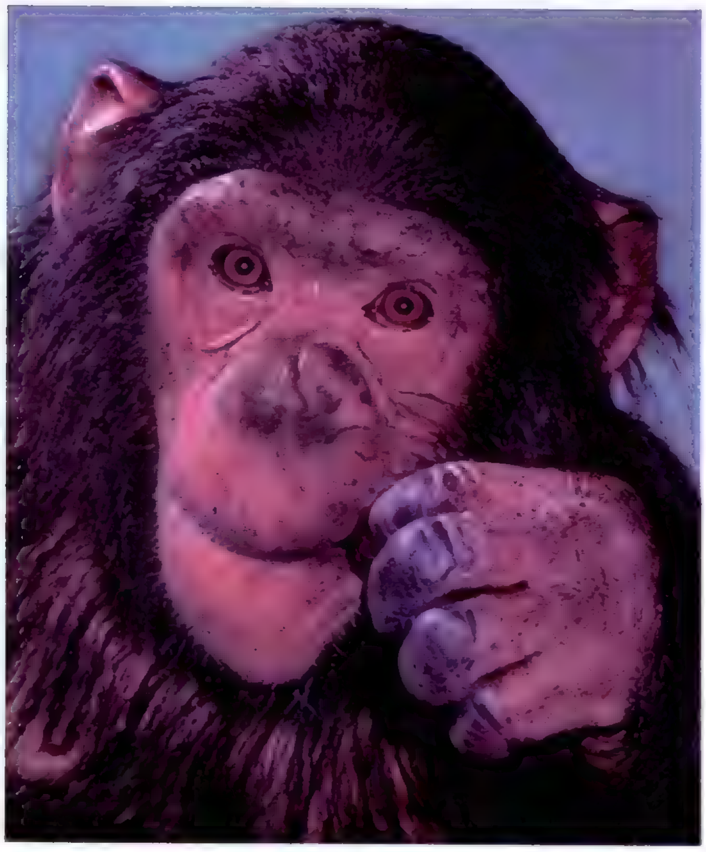
生まれつき非常に好奇心が強く，わけのわからぬ物事は細かく調べてみるのだった。たとえば，火とはどんなものかを見ようとして暖炉をのぞきこんだり，おもちゃにしようとして箱のなかみを出しては，その箱をよく調べたりするのだった。しかし行動は慎重だった。というのは，風船玉にさえおびえるほどおく病だったからだ。だれかにじっと見られているのに気づくと，やってもよいとされていることしかしなかった。反対に見られていない場合には，いたずらのしほうだいだった。もし飼い主がよせといえば，おとなしく従った。ほめられるのが好きで，とくにみごとな体操をほめられると喜んでいた。どんなものをもらってもうれしがってキスをし，抱きついて，子どものように感謝の気持を表わした。

毎晩おりから出してもらっていたので，その時間が近づくと1時間も前から，待ち遠しいという身ぶりをしていた。そういったときに，飼い主がおりから離れていこうものなら，チンパンジーはおこりだして，あらゆる希望を失ったようにころげ回り，金切り声をあげて手足をふり回すのだった。

飼い主の腕に抱かれると，ブロッティ　このチンパンジーの愛称　は子どものようにその胸に頭をもたせかけて，人のいる部屋へただもういきたい，ということしか考えないようであった。部屋へくれば，長いすに腰をかけて，飼い主たちが何を考えているか知ろうとするように，信頼しきった表情で飼い主たちを見ているのだった。ひとりですてておかれないということがわかると，すぐにうれしがるが，もし飼い主が自分をおいてどこかへいってしまいそうだということがわかると，沈みこんで，くちびるをかみ，うめき声を出して飼い主の首にしがみつくのであった。ほかのときなら，やさしい愛情のこもったことばはすばらしいききめがあったが，こんなときばかりはききめがなかった。

かれは子ども，それもとくに小さい子どもが好きで，深い愛情を示した。それも男の子より女の子のほうが好きだったが，それは男の子にからかわれたことがあるからであろう。ふざけることは好きでも，からかわれるのはがまんならなかった。はじめて，生まれて1か月半の飼い主の娘を見せたとき，ブロッテ







ィははっきりと驚いたようすを見せ，すぐに1本の指で娘の顔をそうっとなぜて，娘のからだの上に手をおいた。

他のサルとは違って，このチンパンジーは日のあるうち，あるいは電燈がついている間は，朗らかでごきげんであった。夕食がいちばんの楽しみで，お手伝いさんがお茶を持ってくるのが遅れでもしようものなら，持ってくるまで両手でドアをたたいていた。お茶がもらえると，うれしそうな声をあげてあいさつし，自分から握手さえするのだった。出されたものはなんでも食べた。酒も飲んだが，とくにビールが好きだった。

食事の間いすに腰をかけ，両手を食卓におくか，片腕をついたりしていた。片手で茶わんをつかみ，味わいながらゆっくりと飲む。それから茶わんの底の小さなパン切れを，くちびるか手で取って食べるのだった。食べている間じゅう，四方八方へ目を配っていた。

暖炉からまきを引きだして喜んだり，家の者のスリッパを手にはめて，部屋の中を歩いたりした。あるときは，タオルやハンカチをかすめとって，家事のまねをしようとした。いろいろな品物のほこりを払ったり，掃除をしたりするのが大好きで，ぞうきんでも手に入れると，それを取りあげるのはたいへんだった。きれい好きで，おりや寝床をだんだんよごさなくなった。もし，うっかりきたないものでも踏んづけてしまうと，いらいらしてよごれた足を不愉快そうに見つめ，できるかぎり遠くのほうに，足をのばして振り，最後にはわらできれいにふきとるのだった。そしてわらをおりの外に放ってしまう。

暗やみがきらいで，あかりが消えるとすぐに寝た。ときどき伸びをし，寝返りをうったが，一晩じゅう静かに眠った。暑いときには，とくに伸びや寝返りをした。夏は両手を頭の下に組んで，あお向けに眠っていたが，冬はからだを丸めていた。朝はいつも早く，きげんよく起きて，1日じゅうごきげんだった。

ほかの動物といっしょにいることは好まなかった。大きな動物はこわがるし，小さな動物はいじめた。鳥には興味を示さなかったが，飼い主が鳥の世話をすると，そのときだけ鳥に興味を示した。かれの部屋には灰色のオウムがいて，それがいつも気になっていた。かれは少しオウムがこわかったようだが，といってオウムをからかうのはやめなかった。こっそり近づいて，だしぬけに手を振りあげてオウムを驚かせた。しかしオウムのほうでもいたずらには慣れていて，少しも驚かず，主人から教えてもらった《プス・プス》というささやくような低い声で応じるのだった。そのチンパンジーがほんとうにこわがったのは，ヘビ類とその他の爬虫(はちゅう)類であった。ワニを見せると，すぐに恐怖と怒りの叫び声を発して逃げだそうとした。

みずから選んだ麻酔なしの手術

そのチンパンジーは，首におできができ，つづいて肺炎となり，それが原因で死んだのだった。病気になったり，死にかけたりしているチンパンジーをみる機会は何度かあったが，死ぬ直前の最後の数日間，このチンパンジーほど，まことに人間らしいふるまいで感動させたものは，ほかになかった。その場面は，苦心してチンパンジーを看病したマルチニ博士の語ることばに譲ろうと思う。

「わたしがそのチンパンジーと会ったのは，12月も末のころ，冬のさなかであった。前にもすでに，わたしはかれをみる機会があったし，そのおとなしい性格，生き生きとした物まねや，とくにその飼い主に示す深い愛情には感心していたのだった。病気の，哀れなチンパンジーをみるのは，とてもつらかった。首までふとんにくるまり，じっとあお向けに寝ていて，周囲のことにはまったく関心を示さなかった。顔はたいへん苦しそうだったし，胸はひんぱんに起こるせきの発作で波うち，息も苦しそうだった。ときどきわたしたちのほうへ，だるそうな，苦しそうな目を向けるのだった。

最初の日は，わたしを見知らなかったので，ちょうど子どもがいやがるように，わたしの診察をいやがった。しかし，わたしはだんだんと信用させて，ついに診察できたが，首のリンパ腺（せん）がはれ，そのうえ，ひどい肺炎をおこしていた。喉頭（こうとう）の化膿したできものが，喉頭と気管を圧迫して窒息させる危険があった。かわいそうなチンパンジーは，そのはれもののせいで，息が苦しいのだということがわかっているようだった。救いを求めてわたしの手をつかみ，自分ののどのところへもっていったからである。同僚と相談して，喉頭の上部を切り開き，できものを摘出することに決めた。

治療の手だては見つかったが，手術は容易でなかった。手術中に少しでも動けば，メスが命取りの方向へ動くかもしれなかった。一方，肺の状況からいうと，クロロフォルムで麻酔をかけることはできなかった。3時間も討論してから，麻酔なしで手術をすることにした。4人で押えつけようとしたが，だめだった。必死の力をふりしぼってチンパンジーは，見知らぬ人たちを押しのけて，その人たちがいる間はうなりつづけていた。非常に驚いたのは，力づくではできなかったことが，自然にできたことであった。

かれは，われわれの愛撫とやさしいことばで安心すると，あらためてはれものを診察させてくれた。そのときには，抵抗するどころか，逆に医者たるわたしの手で，早くなおしてくれといっているようにみえるのだった。そうした態度に勇気がわいて，手術にとりかかった。サルは飼い主のひざにすわって，頭

チンパンジーの知能程度は，たいへん高い。
ナチュラリストは，チンパンジーが
約30の音声を使い分けるのを
記録している。（上）

PH. J. BURTON

アフリカにおけるチンパンジーの分布域は
ゴリラの分布域にほとんど重なり
さらに北西にのびている。
それは，森林地帯だけでなく
サバンナ地帯にもひろがっている。（下）



を後ろにそらせ,おとなしくじっとしていた。手術は,できるかぎりすばやく行なわれたが,かれは動きもしないし,苦痛の叫び声ももらさなかった。やがて,はれものは摘出された。肺がおかされていたので,依然として呼吸は速かったが,楽になったようだった。その顔に表われた喜びと,楽になった症状を前にしてわれわれは感動していたが,なんとこの病人は,感謝のしるしにわれわれのほうに手を差しだし,飼い主にはキスをしたのだった。

不幸なことに,はれものがとれても,命を助けることはできなかった。のどの傷はよくなったけれど,肺炎のほうが悪化した。非常な勇気をだして手術を受けたこの利口な友人は,薬もすすんで飲んだ。かれは死の直前まで,穏やかで,天命に安んじる態度を示した。まさにブロッティは,けものとしてではなく,まったくひとりの人間として死んだのであった」

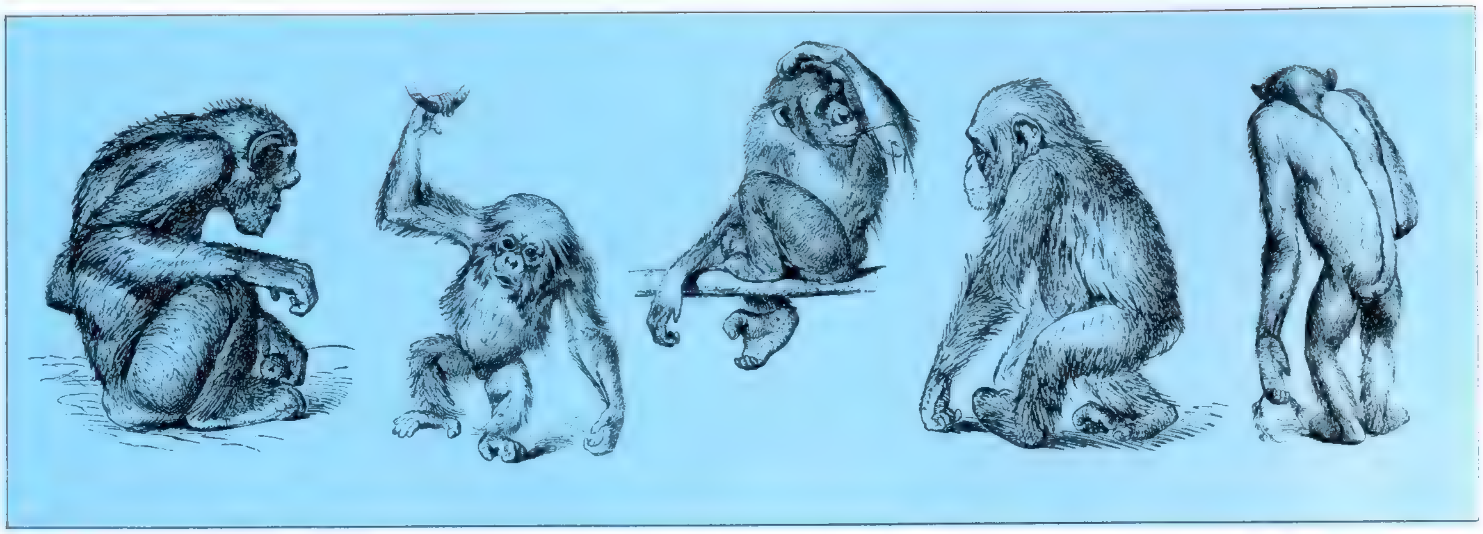
ピグミーチンパンジー

ふつうのチンパンジーのほかにも,身長とか,顔の色合いとかで区別できる,いくつかの亜種がある。たとえばピグミーチンパンジー〔注8〕である。この類人猿は数が少なく,興味深いものである。コンゴ南部の森林にだけすんでいるので,その地域を保護することが,この亜種を守る条件となっている。

ふつうのチンパンジーにくらべると,ピグミーチンパンジーは小さく,からだはすらりとしていて,頭骨は丸く,耳は小さい。くちびるは赤みをおびている。足の第2指と第3指は,部分的にくっついている〔注9〕。その生態はよくわかっていない。しかし30頭くらいの群れをつくって生活していることが,知られている。その気質は,ふつうのチンパンジーより攻撃的ではなく,知能はいっそう高いようだ。1965年には,5か所の動物園で17頭のピグミーチンパンジーが飼われていた。

チンパンジーの歩く姿は
なかなか特徴的である。
前肢の指の背面を地につき
ねこ背になって四つ足で歩く。
けっこうすばやい歩みである。

PH. OKAPIA



オランウータン
Pongo pygmaeus

身長は1.80メートルに達し，両腕をひろげると2.40メートルに及ぶ。スマトラとボルネオの森林にすむオランウータンは，植物性のものと動物性のものを食べていて〔注10〕，完全にほろんでしまうおそれのいちばん高い動物の1つである。

オランウータンとは，マレー語で《森の人》という意味である。このアジア原産の類人猿は，くるぶしまで届く非常に長い腕と，突きだした鼻面，円すい型かピラミッド型の頭部などの特徴によって，アフリカの類人猿とは区別される。しかし幼いときのその頭骨は，ヒトの子どもの頭骨に似ている。このサルのからだは，腰骨のあたりの幅が広く，下腹部が非常に突き出ていて，その短い首の前のほうにはしわがよっている。のどのところには伸縮自在の喉頭嚢（こうとうのう）〔注11〕がある。四肢（しし）は非常に発達していて，手と指は長い。つめは扁平で，足の親指にはよくつめのないことがある。くちびるは突き出ていて鼻は平べったく，鼻孔と鼻孔の間のその奥には，鼻中隔（びちゅうかく）がのびている。耳と目は小さく，ヒトのに似ている。歯は非常にがんじょうで，犬歯が出っぱっている。要するに下あごが上あごより長いのである。

毛は背中では薄く，胸部ではまばらだが，体側では長くてたくさんはえている。上くちびる，あご，頭部や前腕では，毛は上向きにはえ，他の部分では下向きにはえている。顔と手のひらには毛はなく，指の先のほうはほとんど皮膚がむきだしである。毛色はふつう暗い赤毛で，毛のはえていないところは，青みがかっているか，黒っぽいねずみ色である。おとなになった雄のからだは，雌よりも堂々としているし，毛並みもより長く厚く，ひげもふさふさとしている。また，ほおには特徴的な皮膚のかたくなった部分があって，雌とは異なっている。そのかたくなった部分は半月の形をしていて，目から耳にかけたあたりにひろがり，雄の顔を醜くしている。若いオランウータンには，ひげはないが，その毛はよりふさふさとしていて，より暗い色をしている。

オランウータンの生活

この類人猿は，すでに古代から知られていた。ローマ時代の博物学者の大プリニウスは，「インドの山中には，顔はヒトに似て，2本の足か，4本の手足で動きまわる，半人半獣の森の神サテュロスがいる。機敏なので，この動物が年をとっているか，病気でもしていないかぎりとても捕えられない」と語っている。この描写に，新しく詳しいデータがつけ加えられて，だんだん豊富なものとなった。その結果，ついにオランウータンは，野蛮人について述べるのと同じくらい，詳しくわかってきた。

野生のオランウータンの生活についての正確な報告は，イギリスの博物学者ウォーレスの詳細な研究に待たなければならない。ウォーレスは次のように述べている

「オランウータンはスマトラとボルネオにすんでいるが，好んで丘陵にそった沼地の多い平地の森林で生活している。湿地のまん中には，ぽつんと離れた山々がそびえている。その山にはダイヤク族――ボルネオの原住民――が住み，たくさんの果樹が茂っている。この山は，オランウータンをおおいにひきつけているのだ。つまり昼の間，果実を取りにいくのがこの山なのである。夜は，湿地の森に帰る。オランウータンが生きるのには，事実，処女林におおわれた，広大な平地が必要なのである。そしてオランウータンは，インド人やアラビア人が草原や砂ばくをやすやすと行動するように，その処女林中ならどんな方角にも移動することができる

森のなかのオランウータンを見るのは，まったく奇妙である。オランウータンは，いちばん太い木の枝の上を慎重に歩く。長い腕と，それにくらべると短い足のために，その姿勢はほとんど垂直になる。要するに他の類人猿のように，足のうらでではなく，くるぶしでからだをささえて動くのである。かれは好んで，枝がからみついたように茂っている木を選ぶ。そして両腕を上げ，両手で1本の枝をつかみ，その強さを確かめると，次の枝にとびつこうとして身をおどらせる。かれは決して跳躍をすることはなく，しかし非常にじん速に移動するが，急いでいるという感じは少しも与えない。チンパンジーと，とくにテナガザル――東南アジアに分布するヒロバーテス属の小型の類人猿――に見られるこの移動のしかたは《腕わたり》〔注12〕または《懸垂》移動といわれている。このことは，サルの体重を考え合わせてみると，驚くほどの腕力があることを想像させる。

ウォーレスは，けがをしたオランウータンについて，かれらがいったいどうやってその巣を作るかということを発見した。

「けがをすると，オランウータンはすばやく木の頂上までよじ登った。そこで，自分のからだのまわりに大小何本かの枝を集めて十文字に並べる。けがしていないほうの腕で，もっと太くてがんじょうな枝を何本ももぎとって，それを先ほど並べた枝の，より自分のからだに近いところに交差するように重ねていく。数分間で木の枝の厚い囲みをつくると，その中に下からは見えないように隠れた。オ

チンパンジーのこんな格好を
あなたも，動物園で一度は見たことが
あるはずだ。

オランウータンの母と子が
なんと人間の母と子の表情に似ていることか。
スマトラとボルネオにすむが
数が減って，貴重な動物となった今
人間の手で，かれらをふやして
やらねばならない。（右）

PH. B. LUMMER





ここは赤道直下，海抜2500メートルの山地。マウンテンゴリラの集団は，このようなコケにおおわれてひんやりとした，木の茂った山地にすんでいるのだ。

PH. LIFE MAGAZINE





ランウータンは，このような巣の中で夜を過ごすのである。巣は一般に，高さ８メートルから10メートル，せいぜい15メートルくらいの低い木の上につくられている。だからその巣は，風当たりも少ない。オランウータンは，日がのぼり，木の葉の露のなごりがすっかり消えてしまってから，はじめて巣を離れる。同じ木の上で，つづけて２晩過ごすということは例外である。

経験からしてわたしは，オランウータンはだいたい果実，ときには木の葉や木の芽や小さい柔らかい木の枝だけを食べている，ということができる。よく熟した果実よりも，まだ若くて新鮮な，とりわけすっぱくて苦みのある果実のほうが好きである。空腹でたまらないときだけ，地上へおりてくる。この場合は好んで川の岸へ出かけていく。そしておいしい細い根を摘むのである。また，ときには水を求めて地上におりることもあるが，これはまずまれなことである。というのは，木の葉にたまっている水でじゅうぶんだからである。

襲われると思ったときだけ，立って歩く。オランウータンが立ちあがって，棒を手にして歩いている姿を描いたさし絵があるが，あれはまったくの空想である。オランウータンは人間を恐れない。わたしがひょっこりオランウータンに出会ったときには，何分間か，びっくりしたようすでわたしをじっと見ていたが，それからゆっくりと歩いて，いちばん近いところにあった木の茂みに隠れた。

オランウータンの子どもを飼う

ウォーレスは，狩りに出てオランウータンを生けどりにした。これから述べるのはそのときのもようである。ダイヤク族がウォーレスに，木の上におとなのオランウータンがいるという合図をした。そこで小銃を３発撃ってこれをしとめた。供の男たちがその死体を村に運ぼうとしていたとき，沼地にもう１頭のオランウータンを見つけた。

その小さいのは」という書きだしでウォーレスは次のように語っている。「身長はやっと30センチくらいで，おそらく木から落ちたのだ。その木の上で，かれは母親にしがみついていたのだろう。幸いなことにけがはしていなか



この占い師のような顔をしたサルは
シロアタマサキといって
南アメリカ，アマゾンの大森林にすんでいる。
顔は重々しいが
体重は２キロにも満たない。（左）
PH. S. E. F

幼いチンパンジーは，社交家だ。
陽気で，活発で，悩みなどは知らない。
かれらの関心事といえば
食べること，眠ること，遊ぶこと。
それよりほかには，何もないのだから。
PH. DEVEZ-LAUROS - ATLAS PHOTO

った。口にはいったどろを取りのけてもらうと、すぐにうなり始め、大騒ぎをし始めた。このあかん坊を連れていこうとして抱きあげると、赤ん坊はわたしのひげに、力いっぱいしがみついた。それを振り切るのに苦労したが、それは赤ん坊の指先がかぎのように曲がっていたからだ。まだ歯ははえていなかったが、いく日もたたないうちに下あごの門歯が2本はえた。

まずいことに、わたしは乳を手に入れることも、授乳によってこれを育ててくれる哺乳（ほにゅう）動物の雌を見つけることもできなかった。そこでわたしは、哺乳器を使って、重湯で育てなければならなかった。こんな食べ物は、たとえ砂糖やヤシ乳を加えたところで、あまりにもそまつで、不十分なものだった。今日では、ビタミンを使用することによって、飼育する動物の食事の問題はより改善された。

口のなかに指を入れると、必死で乳ぶさを求めるように、ほおをひきつらせて、むさぼるように吸うのだった。しかしむなしい努力に絶望して、うめき声を出してなき始めるところは、腹をすかせた赤ん坊そっくりだった。

わたしは揺りかごのような箱へ赤ん坊を移し、箱の中にはゴザを敷き、毎日ゴザを取り替えて洗った。やがて、このオランウータンのからだも洗ってやらなくてはならなくなった。からだを洗うことが、たいへん赤ん坊の気に入って、よごれたと思うとすぐにうなり始め、泉に連れていくまでうなりつづけた。冷たい水がさっとかかると、足を動かしてとてもおもしろいしかめっつらをするが、頭に水がかかるとわかるとすぐに静かになった。からだをすすぎ、かわかしてからブラシをかけてやると、赤ん坊は大きな幸福に浸っているように思われた。赤ん坊はもう明らかに喜んで、両手両足をひろげて、背や四肢の毛にブラシをかけやすいようにするのだった。

はじめのうちは、手や足で死にもの狂いになんでもつかもうとしていたので、わたしも子ザルの攻撃から自分のひげを守らなければならなかった。というのは、かれはわたしのひげが特別に好きだったからである。静かにしているときは、何か頭のなかに描いたものを捕えようとでもするように、手を高く上げて喜んでいた。手足を使って棒やぼろきれでもつかむと、とても満足していた。

なにもつかむものがないと、自分の両足をつかむとか、両腕を胸の上で組んで、右手で左肩の長い毛を引っぱって喜んでいた。自分の毛で遊ぶのが好きなのだということがわかったので、わたしは母親にかわるようなものを作ってやろうと考えた。スイギュウの皮の切れ端を丸くくくって、地上から少し高いところにつるした。はじめのうちは、これがお気に召したようだった。赤ん坊がこれをなでたり、おもちゃにし始めたからだ。わたしはこの小さい孤児をしあわせにすることができたと思っていたが、まもなくこのおもちゃは、子ザルにいなくなった母親を思いださせ、その乳を恋しがらせることになったのだ。できるだけ背を伸ばして、赤ん坊は母親の乳ぶさを捜し求めた。ところが、口のなかが毛や綿毛でいっぱいになると、おこりだして、乳ぶさを捜そうという試みはやめてしまった。

1週間たつと、うまくスプーンで食べさせられるようになったので、食べ物にも変化をつけることができるようになった。赤ん坊は、卵と砂糖でつくったビスケットを水に浸したのが、うまいサツマイモと同じように好きだった。奇妙なしかめづらをして食べ物を受け取ったり、突き返したりするときのオランウータンの表情ほど、こっけいなものはない。好物の料理を味わうときは、舌鼓を打ち、このうえなくしあわせそうな表情を浮かべて天を仰ぎ見、反対にひと口食べて気に入らないと、しばらく口のなかに入れていてから吐きだすのだった。もしこれを無理に食べさせようものなら、人間の子どもと同じようにおこりだして、うなり声を立てるのだった」

マカックとの同居生活

「わたしがその小さなオランウータンを3週間飼ったころ、1頭のマカック——アジアに広く分布するマカック属のサル〔注13〕——が届けられた。このサルも小さかったが、もうひとりで食べることができた。オランウータンといっしょにしてやると、すぐにこの2匹は友だちになった。小さなマカックは、よくオランウータンのからだや顔の上に腰をかけた。わたしがオランウータンに食物をやっていると、その間にマカックは全部の料理の味見をして、そのうえ全部を平らげようとするのだった。オランウータンが食べ終わると、マカックはがつがつと友だちのくちびるをなめまわし、オランウータンの口をあけては何か食べ残しがないかと捜すのであった。かれはまた、友だちのからだをまくらがわりにしていた。そして小さなオランウータンのほうでは、非常にしんぼう強く、こういったありとあらゆる気まぐれに耐えていたし、また自







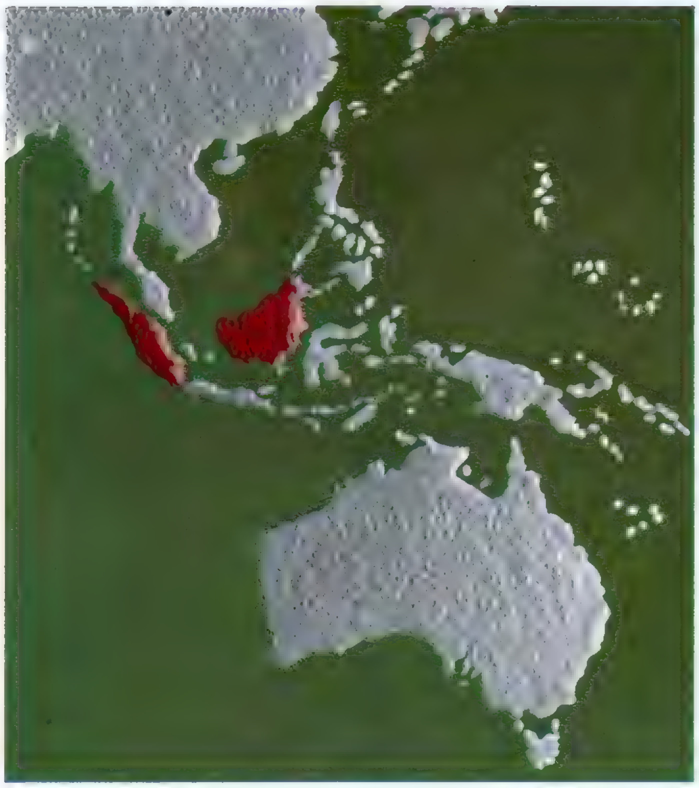
チンパンジーの1頭1頭が
いかに個性的であるかは
この写真を見ればよくわかるだろう。
共通していえることは
かれらが，いかにも賢そうだ，ということだ。

PH W. LUMMER, BURTON - PHOTO RESEARCHERS, DEVEZ - MISSION BIOLOGIQUE AU GABON



たくましい母親の手に抱かれた
オランウータンの子ども。
母親のふさふさした毛につかまっている
この子ザルの手つきがいじらしい。
よく見られる類人猿の母と子の姿である。
PH. W. LUMMER





野生オランウータンの分布域を示す地図。
スマトラとボルネオが
かれらの最後のすみかとなっている。
湿度の高い樹木の密生した森林が
かれらのお気に入りである。

分のそばに、やさしく愛撫できるほのあたたかいものがいることに満足していた。

　ほとんどおない年のその２匹の動物の行動は、まったく奇妙であった。オランウータンは、ほんとうに人間の子どもと同じようにふるまった。オランウータンはあお向けに寝て、足を動かしたり、何か頭のなかに思い描いたものをつかまえようと、手を動かしたり地上をころげまわっていた。不満の気持を表わそうとするときは、口をあけ、歯をむきだし、狂人のようにわめくのであった。小さなマカックのほうはこれと反対に、いつも動きまわっている。走り、とび、手近のものを調べ、自分のおりのへりの上で軽わざをしたり、食べられそうなものは、なんでも奪い取ろうとしていた。要するに、この２匹のサルは非常に性質が異なっていた。そして、マカックのそばにいるオランウータンが、人間の子どもと似ているのがますます目だつのだった。

　ひと月たつと、オランウータンははじめて歩いた。そして５週間たつと、上あごの門歯がはえたのに気づいた。しかし、乳がなかったので背たけも伸びず、太りもしなかった。重湯とコメとビスケットでは、たしかに乳のかわりになるはずはなかったし、このちび君は、ヤシ乳が消化できなかったのだ。そのために、やがて重い病気になった。食欲をなくして骨と皮ばかりにやせ細り、１週間のうちに死んだ。大きくしようとして３か月育ててきたこのオランウータンの死は、わたしにとっては非常に心の痛むことであった」

船に乗ったオランウータン

　もうひとりの信頼するに足る観察者が、ウォーレスの話を補うような報告をしている。これはその人が、３か月間船の上でオランウータンを研究した結果である。「船がアジアの海を航海している間、オランウータンはデッキにいて、夜になるとはじめて船室へはいって眠るのだった。昼のあいだは、そこらにあるものをなんでも手にとって、これをきれいにして時を過ごしていた。また、同じ船に乗っていたほかの小さいサルたちと遊んだり、船にそなえつけてある、いろんなもので遊び興じていた。航海中かれは、実にさまざまなことをした。たとえば１日に何回となく、驚くようなすばやさで、エネルギッシュにロープをよじ登るのだった。

　船がスンダ海峡を越えると、オランウータンは少しずつ元気がなくなってきた。おそらくそれは、気温がしだいに下がってきたために違いない。遊ぶのも、からだを動かすのもやめて、もうほとんどデッキには姿も見せず、毛布にくるまっていた。南方の暖かい地域を通り抜けてしまうと、かけぶとんにくるまって、船室の中で身動きもしないでいた。かれは自分ひとりで、細心の注意を払いながらベッドのしたくをして、手の甲で２、３度マットレスをたたいてからでなければ寝なかった。あお向けに長々と寝て、顔までふとんを引きあげ、口と鼻だけを外に出して、12時間というもの少しも動かなかった。

　生まれた国にいれば、朝の６時ちょうどに起きて、夕方の６時には夕日を浴びて寝た。船が西に進むにつれ、かれは自分の日課を変えて、もっと早く寝起きするようになったけれど、いつも12時間は眠った。かれの日課の変更は、時間帯が変わるに従って変わる船内の時間表とは、正確に合っているわけではなかった。けれども、そこには、ある規則めいた

オランウータンは，地上では
前肢を地につけて立つが
木の上では，こんな格好もする。
後肢で枝を握っているところに注目あれ。
PH. RUSS KINNE

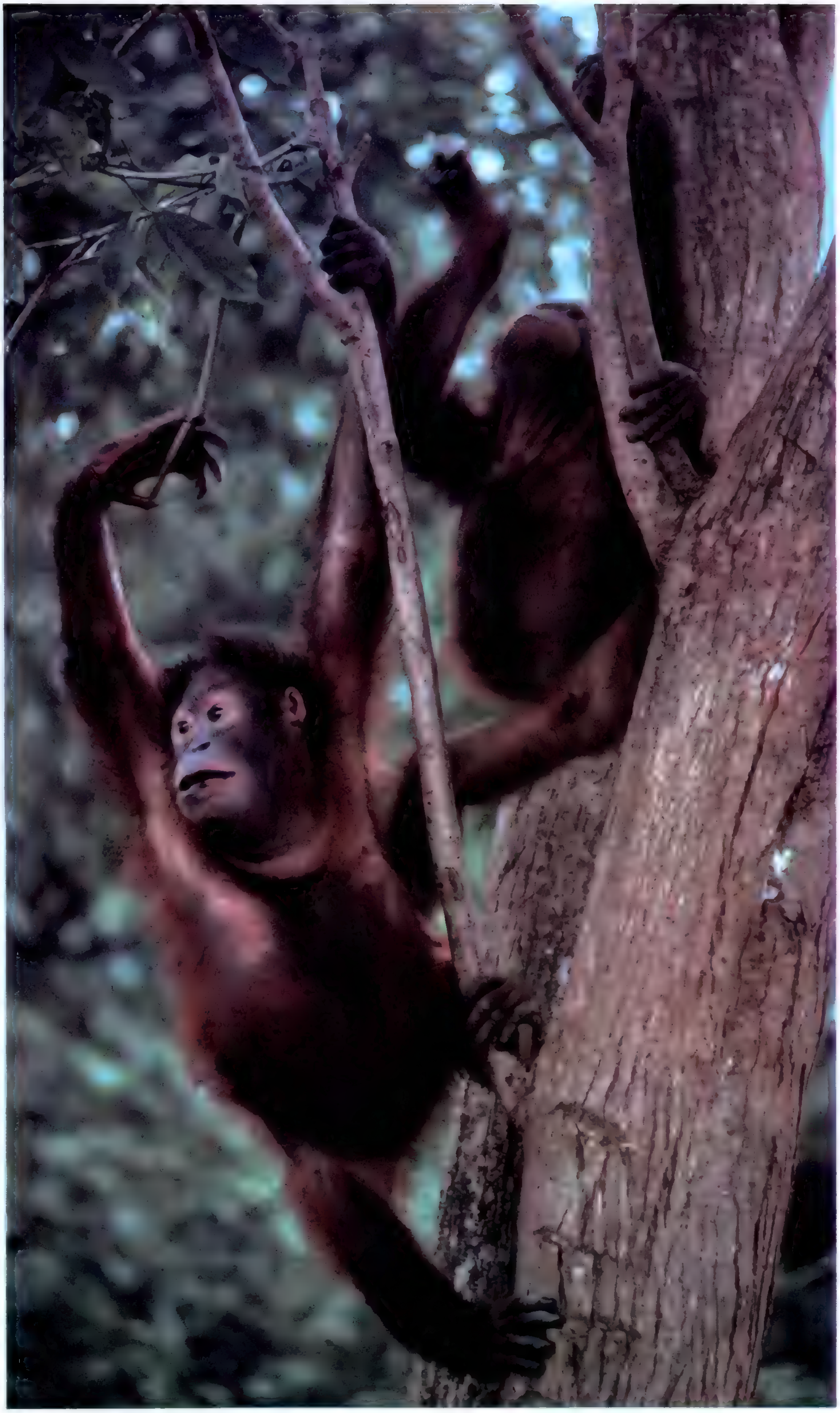
ものがあった。たとえば、喜望峰と同じ緯度のところでは、オランウータンは午後２時に寝て、朝の３時ごろに起きた。

かれはヤシの実が大好きだったけれど、同じように塩もコムギ粉もサゴ——サゴヤシの木の芯からとったコメ粒状のデンプン——も食べたし、悪知恵をはたらかして、自分の食物に肉を少しばかり加えるのだった。もしかれが何かをとったとすると、なぐっても取り返すことはできなかった。１日に肉を１キロまでは食べたし，料理人のわずかなすきをみてよくコムギ粉を盗んだ。それはすぐにわかった。というのは，いつも手をきれいにする習性があるため，頭に手をこすりつけてふくので，まるで頭におしろいをつけたようになったからである。

火曜日と金曜日の食事の時間には，必ず船員たちのところへやってきた。この日には，砂糖とニッケイのはいったサゴがゆが出たからである。時間は正確で，２時かっきりに船室にはいってきた。自分のからだをよごさないように注意しながら静かに食べたが，スプーンの使い方は決して覚えなかった。さらごと口に運んで，なかみを飲み込み，ただの１滴もこぼさなかった。アルコールのはいった飲み物が大好きで，昼の食事に出る１杯のブドウ酒をたいへんに賞味するのだった。その味わい方は奇妙だった　まず下くちびるを長く突きだし，８センチ角の杯のような形にする　そして，この杯の中にブドウ酒を全部注ぎ込んで，歯の間から吸い込みながら，ゆっくりと味わい，ちびちびと飲み下すのだった。それは数分の間続く一種の儀式だった。最後の１滴を飲んでしまうと，おかわりをもらおうとして自分のコップを差しだすのだった。かれは決してさらもコップもこわすことはなかったし，そのうえ，取り扱いが非常に注意深く，さらをこわすのが大好きなほかのサルたちとは違っていたのである

わたしのオランウータンは，２つの音声だけで自分を表現した。第１の音声は軽い喉音（こうおん）で，これは激しい興奮を表わし，第２の音声はまるでスイギュウのような恐ろしいうなり声だった。しかしこの２番めのうなり声は，２度しか聞かなかった。それは一群のクジラが少し船に近づきすぎたときと，わたしが捕えたウミヘビを見たときである。

不幸なことに，ある痛ましい事故のために，このすばらしい動物はドイツへ着く前に死んだ。自分のベッドからバビ——このオランウータンはこう呼ばれていた——は，船の酒保係がラム酒のびんを荷造りしているのを見た　そして何本かのびんは，ただコルクのせんが



オランウータンは，大型類人猿のなかでは
樹上で過ごす時間がもっとも多い
地上におりてくるのは
水を飲んだり，果実を拾うときだけで
寒いときは，木の葉にくるまって眠る．

PH J KERN





してあるだけだということを見てとったのだった。ある晩，バビの飼育係がびんの音を聞きつけ，それから船室のあかりでひとつの影が，酒類の戸だなの前でせかせかと何かをしているのを見た。かれは，それがオランウータンだとわかって，びっくりぎょうてんした。バビは，せんを抜き，ほとんどなかみがからになったラム酒のびんを振り回していた。あたりには，輸送のためにわらが巻かれたままの他のびんが，何本か散らばっていて，それもこのいたずら者がからにしてしまっていたのだった。10分もたつと，バビはとても激しい興奮に襲われた。かれはいすやテーブルの上におどり上がって，こっけいな身ぶりや動作をしたが，それはまさに酔っぱらいであった。押えようにも，まったく押えつけることはできなかった。

興奮は15分でおさまった。バビは床にのびて，口からよだれをたらし，とても激しいけいれんに苦しんでいた。数時間たつとわれにかえったが，高い熱が出ていて，その熱のために死ぬことになったのだった。病気のあいだは，水で割ったブドウ酒を少し飲むだけだった。一度脈をとられてからは，手首を主人のほうに差しだして，またみてほしいといっているようだった。そのまなざしには，非常にもの悲しい，人間的なところがあったので，看護をする人たちも目に涙を浮かべていた。かれの容態は急に悪くなって，２週間後には非常に高い熱の発作のために死んだ

オランウータンとチンパンジー

「わたしは何頭かのオランウータンを研究する機会があったが，快活できげんがよいという点では，同じ年齢のチンパンジーにくらべられるものは１頭もなかった。オランウータンの静かで穏やかなふるまい，その茶色の目のやさしいまなざしには，何か憂いを帯びたふびんなものがうかがわれた。要するにオランウータンは，あらゆる点でチンパンジーとはまるで反対であった」

こうした長い物語につづいては，アフリカの子であるチンパンジーの盛んな元気と，アジア的なオランウータンのおちつきとについての考えを，まとめておきたくなるであろう。だがそれは，アフリカの人種は決してメランコリックではなく，アジアの人種はつねにメランコリックである，と主張するのと同じくらいに，不当なことであろう。ゴリラはチンパンジーと同じアフリカ産でありながら，陽気な性質はひとかけらももってないのである。

動物をたがいにくらべて，あれはあいきょうがあり，これはメランコリックだ，と主張

このオランウータンは
分別くさい，年よりじみた顔つきだが
実はまだ赤ちゃんである。（上）

とびはね，じゃれつく，幼いオランウータンの
姿態を描いたデッサン。（下）

PH. W. LUMMER



おとなのオランウータンの顔。
子どもにくらべ，ヒトに似たところが少なくなり
１頭１頭の顔つきは，たいへん個性的になる。

PH. W. LUMMER

することは、いささか冒険だ。われわれの判断は、擬人主義〔注14〕によって非常に誤まった観察になる可能性がある。一般にわれわれは、動物の表現のなかに、人間的な、だからこそ人を安心させる何かを見つけようとしている。だが、われわれはよくまちがえる。歯をすっかり出して笑っているように見えるチンパンジーは、しばしばおびえている動物なのである。ある種と他の種では、感動に対する反応のしかたがまったく異なることがある。イヌは喜ぶと尾をふるが、ネコはおこると尾をふる。この、まるで正反対の意味を伝える身ぶりは、一般的にいっておそらく、いかにこの2種の動物がおたがいに理解し合うことがないか、ということを説明している。つまりかれらは同じ《ことば》を使わないのだ。

さらにいえることは、森林のなかにすみついて外に出ない動物たちは、森林のあいだにできた大きなあき地や、大草原のようなひろびろとした場所で生活している動物たちよりも、陰気で、疑い深く、非社交的――このことばを使うべきだ――である。ひろびろしたところにいる動物は、森のなかにいる動物よりも、もっと遠くから危険を察知するので、それほどびくびくしているようには見えない。かれらは熱帯の密林の薄暗がりで"ハッ"と息をつまらせるような恐れを受けないわけである。チンパンジーの陽気で元気おう盛なのとは反対に、オランウータンやゴリラのメランコリックで慎重な精神は、密林が与えたものであったということができる。

オランウータンが、すなおで知能がいかにすばらしくとも、この大きなサルを見せ物にしようとは、だれも思わないだろう。第1にそれはあまりにも貴重な動物であり、たとえ1頭でも失うような危険をおかすことはできない。また見物人の笑いを誘うようなことも、かれらはなにひとつしないであろうからである。いつもおもしろく、明るくて、拍手に敏感なチンパンジーは、しかめづらをしたり、とっぴなことをしたり、軽わざをして拍手かっさいを受けることしか考えていない。こんなに楽しそうなようすをしているので、だれもチンパンジーの運命を哀れには思わないのである。

黙りこくって、寂しそうで、おどおどしているゴリラとオランウータンは、すみのほうにいて、人からは忘れてもらいたいとそればかり願っている。動物園の中でさえ、たとえばロッテルダムの動物園でも同様に、オランウータンがおりの前のガラスのところへ出てきたのを、だれも見たことはない。かれらは自分の枝や葉の茂みのなかにいて、おりの前に列をつくって、好奇の目でみつめている人びとの群れを、少しも意識していないようにみえる。

ゴリラやオランウータンは、チンパンジーよりも不幸なのであろうか？　しかし、おりの中に20年も閉じ込められていたオランウータンは、生まれた森について、いったいどんな思い出をもっているというのだ。おりの中でかれは生活を営み、腹が減れば好きなものを食べるし、昼も夜もおりの中はいちばん気持のいい温度になっているのだ。ましてこのうちの1頭は、生まれながらにしてとらわれの身であったとするならば、自分の現在の境遇と、知ることさえなかった自由とを、どうしてくらべることができるだろうか。

おりの中のこの大きなサルたちが何を考えているのか、われわれには絶対知ることはできないし、また、その態度や、顔の表情に基づいて、われわれの判断を下すこともできないのである。バンセンヌにあるパリ動物園の園長ヌーベル博士をはじめ、動物園の専門家たちがいっていることは、要するに飼育されているにもかかわらず繁殖する動物は、おそらくしあわせな動物だ、ということである。

その証拠には、元気でない動物も、動物園の生活状態と、食物がよりよく改善されると、はじめて繁殖し始めるのである。これはさほど古いことではない。そして動物園での動物たちの出生数は、とにかくその動物園の質と管理のよさの指標になっているのである。

動物のなかには、きわめてまれではあるが、つかまえられると繁殖しなくなるものがある。ゾウもその1つであるが、しかしヨーロッパやアメリカやアジアの大動物園の責任者たちは、いずれの日にか、生命の奇跡をつくりだすことに望みをかけている。そうなれば、飼っているあらゆる動物に、精神的な喜びと繁殖の希望を与えることになるであろう。



4–20

よっ、[illegible]たねぇ
とてもいいたけなオランウータンの顔。
《森の人》とは
原住民がつけた名前だが
こんな表情を見ると，ナルホドとうなずける
PH. J. MARKHAM

カラーページ解説

野生類人猿の研究

伊谷純一郎

3号には、ゴリラがいかにして西ヨーロッパの人びとに知られるようになったか、といういきさつが記されていた。しかし、野生の類人猿についての真の知識が得られるようになったのは、1930年以降のことで、ゴリラについては1960年、チンパンジーは1965年以後になって、やっとその社会の実態をのぞくことができ、オランウータンは、いまだ多くのなぞに包まれているというのが現状である。

1929年、R.M.ヤーキスによってアフリカに派遣された2人の研究者がいる。ひとりは、H.C.ビンガムで中央アフリカのコンゴ東部に、もうひとりのH.W.ニッセンは西アフリカのギニアに、それぞれゴリラとチンパンジーの調査にはいった。かれらは帰国して、それぞれ詳細な報告を書きあげているが、さすがにアフリカのジャイアンツは、この若い2人の研究者のアタックで簡単に全容を明かすような相手ではなかった。

1937年、C.R.カーペンターによって、綿密な研究のなされたテナガザルについては、次号に譲り、ここではゴリラとチンパンジーにしぼることにしよう。

1958年、今西錦司博士とわたしは、日本モンキーセンターの派遣でアフリカに渡った。野生ニホンザルの調査を始めてちょうど10年、わたしたちは、ヒトをのぞくもっとも高等な種を手がけたいという希望に燃えていた。アフリカではウガンダ西南部のビルンガ火山、その北のカヨンザの森、火山の西端のコンゴのカバラなど、マウンテンゴリラの生息地をめぐり、さらにカメルーンの森林のなかで、ローランドゴリラを追跡した。

この予備調査をもとに、翌1959年には、河合雅雄博士と水原洋城氏とがビルンガ火山東部で、1960年にはわたしが単独でカヨンザの森で調査を行なった。

シャラーのゴリラ研究

ころを同じくして、アメリカにも野生ゴリラに情熱を燃やしている人びとがいた。ウィスコンシン大学のJ.T.エムランとG.シャラーで、かれらは1959年にアフリカに出かけ、マウンテンゴリラの分布調査ののち、東部コンゴのカバラにはいった。

ここは、わたしたちが予備調査のとき2日間だけはいったが、ベルギーの厳重な保護政策のために、それ以上の調査を拒まれたところだ。結局、このカバラが、マウンテンゴリラの唯一の宝庫であった。ベルギーの半世紀にわたる保護政策が200頭ものゴリラの楽園をつくりあげていたのである。シャラーの慎重な方法が効を奏して、アフリカのジャイアンツの1つはかれの手に落ちた。この成果は「The Mountain Gorilla」にまとめられ1963年に出版された。

1960年、コンゴにはいるつもりで出発したわたしは、予期しないコンゴ動乱のために、調査をウガンダのカヨンザの森に変更した。そこで、ほぼ調査を完了したシャラーに出会った。かれがカバラの山から背負ってきた豊富な資料にくらべ、わたしのカヨンザでの調査は、あまりにも実入りの少ない、果てしない困難の連続だった。一方、コンゴの動乱はいつ果てるとも知れなかった。わたしはゴリラを捨て、もう1つの手つかずの大物で、しかも、ゴリラ以上に豊富な内容をもっているに違いないチンパンジーに取り組む決心をした。



イチジクの実を食べにきた、ウガンダ、ブドンゴの森のチンパンジー。撮影　鈴木　晃（京大霊研）

チンパンジーの餌づけに成功

そうと決めると、調査の後半はチンパンジーの予備調査に向けた。ウガンダのブドンゴの森は好ましいフィールドだったが、わたしは、疎開林のなかにすむ、タンガニーカ（今日のタンザニア）のチンパンジーに心を奪われていた。ウガンダのチンパンジー生息地のあらかたを走りまわり、それから南下してタンガニーカ湖にきたとき、その年の5月ごろから調査にかかっているJ.グドー女史に出会った。彼女は、来年はここを引きあげるというので、わたしは予備調査を終えて帰国し、今西博士を中心にチンパンジー攻略のための準備を進めた。

1961年、はじめて文部省の科学研究費を得て、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊を組み、三たびアフリカの土を踏んだ。グドー女史の調査が長引いていて、ゴンベストリーム・チンパンジー保護地にははいれなかったが、その南方のまったくの無人地帯カボゴにはいり、基地を構えて調査を開始した。

この困難な調査は今もなお続いている。わたしたちは、より好ましいフィールドを求めて奥地へ、奥地へとはいっていった。今までに、11人もの研究者がこの調査に従事した。

わたしたちはこの調査においても、グドー女史に先を越された。1963年に、彼女はわたしたちより早く餌づけに成功したのだ。しかし、わたしたちも3年遅れて、メンバーの1人である西田利貞博士がカソゲのチンパンジーの餌づけに成功した。今日、世界で2か所だけ、人を恐れない野生チンパンジーの集団ができ、そこでは1頭1頭に名まえがつけられ、血縁関係が記録され、詳細な行動や社会関係、複雑をきわめる社会の構造などの分析が進められている。■

カラーページ注

〔注1〕**チンパンジーの種類**　パン属は、ふつうのチンパンジーとピグミーチンパンジーの2種で、前者をチンパンジー、チェゴチンパンジー、ケナガチンパンジーの3亜種に分ける。ふつうのチンパンジーはコンゴ川の右岸に、ピグミーチンパンジーは左岸に分布する。

〔注2〕**矢状隆起**　雄ゴリラの頭骨の頭頂部には、正中（せいちゅう）にそった高い骨の隆起があり、矢状隆起（しじょうりゅうき）と呼ばれる。強大な咬筋（こうきん）の付着部で、咬筋の働きと関係があるとされる。チンパンジーにはこの隆起はない。

〔注3〕**ブローカの中枢**　ブローカの言語中枢、運動性言語中枢ともいう。言語、文字、身ぶりなどを用いて意味を表現する中枢で、大脳皮質の下・中前頭回の後部にある。フランスの人類学者ブローカの発見による中枢である。

〔注4〕**チンパンジーの群れ**　集団のつくり方は、きわめて気ままで、このため長い間かれらの社会単位さえ不明だった。西田利貞氏の研究で、つねに離合集散を繰り返しながらも、30〜60頭で、ある地域と結びつき、安定し、永続性のある単位集団をなしていることが判明した。

〔注5〕**チンパンジーの食べ物**　最近の研究で、そうとう肉食をしていることが明らかになった。各種のサル、小型のレイヨウ、ノブタなどの肉で、自分で捕えて生肉を食べるのが観察されている。植物では、漿果（しょうか）、マメ科の堅果などが多い。また、昆虫も食べる。

〔注6〕**刷り込み現象**　孵化（ふか）したてのガチョウのひなを、おとなのガチョウのところへ持っていっても、ひなはガチョウを親と認めず、最初に出会った人間を母とみなすようになる。鳥や哺乳類のあいだで広く見られるこの現象を、コンラート・ロレンツは刷り込み（刻印づけ、ともいう）と呼んだ。

〔注7〕**ブドウ販売器**　最初にこの実験をしたのは、アメリカのR.M.ヤーキスとM.P.クロウフォードで、この実験でチンパンジーがあるものを他のものに替えて用いる能力、つまり象徴的機能をもっていることを実証した。この能力は言語的機能と深い関係がある。最近アメリカのガードナー夫妻によって、チンパンジーに聾唖者の身ぶり語を教え、現在130語を覚えて、身ぶり語でガードナー夫妻との間の会話が可能となっている。

〔注8〕**ピグミーチンパンジー**　ボノボと呼ばれる。ふつうのチンパンジーよりやや小型で、顔色は黒く、足は長く、頭は丸い。注目されながらも、生息地コンゴの政状不安のため調査が行なえず、社会構造など不明。〔注1〕参照。

〔注9〕**足の指の癒合**　第2指と第3指が部分的に癒合しているのは、樹上生活をする霊長類におうおうにして見られる例である。

〔注10〕**オランウータンの食べ物**　野生オランウータンの肉食の例はない。ただ小鳥の卵は食べるようだ。果実、木の葉が中心で、好物はドリアンの実。

〔注11〕**喉頭嚢**　喉頭部に開口する気嚢でその機能については諸説があって定かではない。

〔注12〕**腕わたり**　枝わたりともいう。テナガザルとオランウータンにもっともよく見られる移動の様式。

〔注13〕**マカック**　マカック属サルの総称。ボルネオのマカックはブタオザルとカニクイザル。本文ではいずれか不明。

〔注14〕**擬人主義**　アンソロポモーフィズム。動物の行動や心理を人間中心に推しはかる態度をいう。科学的な観察では、この態度を避ける。■（伊谷純一郎）

野生動物こんにちは　2

生けどられたコモドオオトカゲの子ども
鋭いつめを地面にたてて抵抗する



威嚇するコモドドラゴン

バリ島を出てから3日めの朝，わたしたち取材班を乗せた，小さな不定期連絡船は，コモド島の入り江へはいろうとしていた

赤茶けた島の頂が目の前に迫ってくる。あの島に太古の巨竜に似た風貌をもつコモドドラゴンがいる。わたしの胸は高鳴った。

インドネシアの小スンダ列島のフローレンス島とコモド島にしか現存しないこのコモドオオトカゲは，体長3メートルにも達するという，世界でいちばん大きいトカゲだ。そして，このオオトカゲの生態ほど，なぞに包まれ，神秘化されているものはない。現地の人びとは，このオオトカゲを〝ブアヤ・ダラ〟と呼ぶ。〝陸ワニ〟という意味だ。はじめて，その存在が確認されたのは1912年。

もう目と鼻の先に迫った浜べには，たくさんの子どもたちが現われた。そのあとから，男たちも集まってきたが，女性の数は意外に少ない。これはあとで知ったことだが，この島では，女性は，なるべく他国人の前には，姿をさらさないのがしきたりだということだ。

3隻の大型カヌーがこぎだされてきた。島の人びとは，この大型カヌーで，外洋にまで乗りだし，漁労に従事するという。われわれの船に横づけされたカヌーから，制服制帽に威儀を正したソンチョー（酋長という意味のインドネシア語）が，まっ先に甲板にのぼってきた。

甲板に積まれている，われわれの撮影機材，食糧，薬品，発電機，島の人びとへの贈り物のタバコや衣類は，このソンチョーの指示で，テキパキと，カヌーに積みかえられていった。

島では，2軒の家が，わたしたちのために提供された。木造の高床式で，屋根はヤシやバショウの葉でふいてある。

すでにインドネシアは雨のシーズンにはいっていた。この季節，コモドオオトカゲは，山深くはいり，部落の周囲には姿を見せない。

雨で捕獲に失敗

翌日から，わたしたちのコモドオオトカゲ捜索が始まった。わたしたち一行3人と通訳のスブル君，インドネシア政府自然保護官のミスター・スギト，それに3人のバリ島の人びとを加えた計8人が一行のメンバーである。部落の近くの山，とはいっても道らしい道がないので，カヌーを使い，入り江づたいに裏手へまわる以外はない。

オオトカゲをおびきよせるためのいけにえになるヤギが，へさきにつながれる。カヌーのバランスが，ちょっとでも狂うと転覆は免れない。

30分ほどこぐと，しゃれた建物のある入り江にはいった。アメリカのニューヨーク動物学会のオーヘンベルグ博士夫妻と3人の子どもが滞在している小屋である。博士はコモドオオトカゲの生態研究のため，この島に研究所を建て，長期滞在をしているのだが，わたしたちが訪れたときはおりあしくクリスマス休暇でバリ島へ出かけていて不在。アマドという，この島にいるたった1人の兵隊が留守番をしていた。

アマド君の話によると，研究室の裏山には，博士がえさを使って集めたので，コモドオオトカゲが，かなり生息しているという。

けわしい山道は，船酔いが残っている身には苦しい。おまけに雨まで降ってきた。やっとたどりついた山の開けた斜面にヤギの肉をつるして，わたしたちは，コモドオオトカゲの出現を待った。

しかし，ますます激しくなった雨足が，ヤギのにおいを消してしまうのか，ついにオオトカゲは姿を現わさず，ミスター・スギトが部落のはずれにしかけた捕獲用のわなも，南国特有のスコールに流されてしまった。

翌朝，宿舎の外が騒がしくなった。「ブアヤ・ダラを捕えたぞ！」通訳のスブル君がとび込んできた。

兵隊のアマド君が意気揚々とずだぶくろをかついでいる。わたしたちは，おそるおそる，かれのおろしたずだぶくろを囲んだが，中からはがんじがらめにされたオオトカゲが引きずりだされた。

体長約1メートル，全体にかっ色のはん点が目だつオオトカゲだ。ミスター・スギトによれば，生後1年足らずの子どもオオトカゲだという。子どもといっても，この巨竜の小型版は，無気味な赤い舌を出して〝シュー，シュー〟という鼻息でわたしたちを威嚇した。

大型のオオトカゲは，島の奥地にすんでいて，体長4メートルに達するものさえいるという。わたしたちは，そのオオトカゲを是が非でも捕えたいと思い，14人の捕獲隊を組織することになった。

本格的な雨期にはいり，激しい雨が断続的に，襲ってくるようになった。海岸に沿って，細長く並んでいる部落の後ろの丘を越すと，島のようすは一変する。樹林の間にはシカの角やイノシシのあごの骨が散乱しているのだ。

島の人びとは，獣肉を食べない。とくにブタの親類筋に当たるイノシシは，回教徒であるかれらは，決して食べようとはしない。とすると，これらの骨は，コモドオオトカゲのえじきになったものに相違ない。古い記録によれば，この肉食のコモドオオトカゲは，人間さえも襲うという。わたしたちは，ちょっとおく病風に見舞われた。

4時間ほど歩いて，キャンプ地を見つけた。小川のほとりの開けた草原である。タケで即席の家をつくったが，地面に直接建てた家なので，オオトカゲに対しては，まったくの無防備状態。用心のためキャンプ地の三方に火がたかれた。

不安も疲労には勝てなかった。うとうととしたとき，ものすごい雷鳴とともに，スコールが襲った。ビニールシートの継ぎめから滝のように流れ込む雨水に，まんじりともせぬ一夜だった。

すさまじい野性の戦い

一夜明けて，天気は回復したが，捕えておいた子どものオオトカゲに逃げられてしまった。がっかりしているところへ，追い打ちをかけるように，けたたましいニワトリの鳴き声。あわててかけつけたとき，2メートル近いコモドオオトカゲが，わたしたちの食料のニワトリをひとのみにして逃げていくところだった。

「ブアヤ・ダラだ！」裏で，料理係のズキ少年が叫ぶ。別のオオトカゲが，疎林のなかに消えていく。ここはどうやらオオトカゲの生息地のまん中らしい。

その日の午後，わたしたちはコモドオオトカゲが，ヤギを襲うのを目撃した。身構えるヤギに，強力なしっぽの一撃を見舞い，そして，すばやく首をひとかみしたあと，腹に鋭いきばを食い込ませる。それは，すさまじい野性の戦いであった。

このキャンプ地から，1時間ほど登った小高い丘の上に池があり，動物たちの水飲み場になっている。オオトカゲは水辺に潜んで，水を飲みにくるシカやイノシシをねらう。

わたしたちは，ここにわなを作って，オオトカゲを捕えることにした。竹囲いの中にえさをつるし，とびつくととびらがしまる，ネズミ取りの大型のものだ。

3日たった。日に照らされて，いいかげんいらいらしてきたころ，

「来た！」

3メートルに近い巨大な雌だ。彼女は，わなの周囲をうろつくが，警戒してか，なかなか，中へはいろうとはしない。長く赤い舌を出しながら，囲いの周囲をぐるぐる回っている。

やっとわなにはいった。バタンとしまるとびら。

鋭いつめと牙。シュー，シューという威嚇の音。前世紀の遺物といっても決していいすぎではないグロテスクな容貌が，こうしていま目の前にいた。■

（日本テレビ・ディレクター・土屋光明）



ヤギの肉を
かみちぎり
むさぼり食う
コモドオオトカゲ
（中くらいの雌）

動物園のランチタイム

動物園のランチタイムは午後３時，ほとんどの動物たちがこの時間に食事をする。

草食獣にとっては，午前10時の朝食のあと，文字どおりのランチタイム，肉食獣には１日１回のいちばん楽しい時間であると同時に，動物園の見どころの１つでもある。

マナーの悪い子グマ

ライオン，トラ，ヒョウ，ピューマ，ジャガーなどの猛獣は，１頭当たりだいたいクジラ肉６キロ，骨つきメンヨウ肉１キロ，ニワトリの頭１キロぐらいを一度に食べる。

野生動物の餌づけはむずかしいものだが，動物園の動物はすっかり飼育化されているので，こうしたえさへの食欲はすさまじい。片っ端から平らげていくようすは，見ていて気持がいい。

食事のマナーでおもしろいのはゾウである。鼻でわら束をすくいあげ，口にくわえると，また鼻を使ってわらをしごいてしぶをとりながら食べる。この一連のリズミカルな動作は，ゾウの鼻の微妙な働きを表わす好例である。

ゾウの食事ぶりのおっとりしているのにひきかえ，子グマの食事はじつに騒々しい。おのおののさらに盛られたえさよりも，隣のえさがよく見えるのか，自分のものを７，８分め食べると，今度は猛然と隣の仲間のさらに襲いかかり，組んずほぐれつの取っ組み合いを始める。観客から投げられたビスケット１枚を，本気になって奪い合うこともある。

キツネはえさを与えられると，そこから自分の分を２，３か所に運びわけてから食べ始めるという，奇妙な習性を見せる。

しかも，人間の子どもが自分のお菓子につばをつけるように，運んでいったえさに，かれらの小便をかけて，その所有権の確保をはかる。

ゴリラは美容食

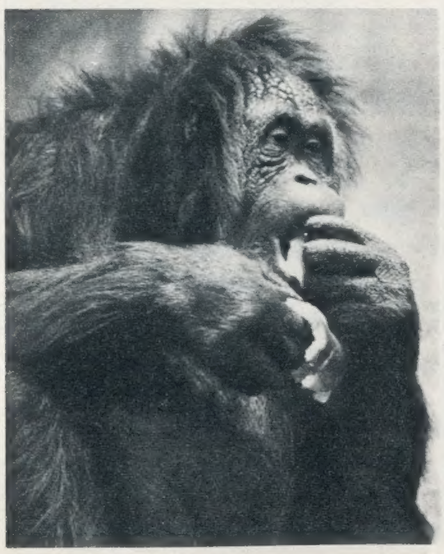
味にうるさいのはゴリラだ。ふつう動物の味覚は，甘いものと苦いものを識別するくらいしかない。甘いものは食べてよし，苦いものは食べてはいけないといった程度の，食物の基本的な選択につかわれるだけだが，ゴリラの場合は違う。甘いものはもちろん好物だが，ちょっと苦みのあるセロリなどを喜んで食べるし，数種類のえさを与えると，くだもの，パン，飲み物といった順に，いろいろなものを順序よくまぜ合わせながら食べるすべを知っている。ライオンなどのように，片っ端からということはない。

野生のゴリラは，ジャングルでは約70種類ぐらいのえさをあさるようだが，動物園でのメニューはあの容姿に似ず，ちょっとした美容食である。リンゴ12個，バナナ７本，ミカン６個，サツマイモ１本，ニンジン１本，タマネギ１個，コマツナ500グラム，コッペパン３個，ビスケット30枚，ユデタマゴ３個，牛乳７本，ヨーグルト11本，これが１日分の食事である。

ただし，これだけのものを与えても，野生のときのようにふんだんに自然食をとれないため，歯をいためるゴリラが多い。

先日，ある動物園では，ゴリラが虫歯によって死亡した例がある。チンパンジーやカバにも虫歯のものが多く，カバは食後にわらのつまった虫歯を掃除してやると，気持よさそうに，いつまでも大きな口をあいている。

甘いものが大好物なオランウータン。



味にうるさいライオン

海外の動物園のなかでは，アメリカのサンジエゴ動物園のように，園内の木をすべてユーカリにしてコアラベアを飼うなど，自然食を与える飼育法をとっているところもあるが，日本の動物園は北ヨーロッパ的な人工飼育法をとって，動物の体質を変えていく方法をとっているところが多い。

その一例が人工飼料である。これはえさにするものの不足や値上がりからも考えられたものだが，肉食獣ではあまり成功していないようだ。

今年のはじめ，多摩動物公園の放し飼いのライオン16頭に，コムギグルテンからつくった人工肉を与えるテストが行なわれた。１頭のライオンは味覚音痴だったのか，いくらでも食べたが，他の15頭はクジラの肉など，いつものえさが足りないときにはしぶしぶ食べたが，それも１つか２つで，なかにはにおいをかいだだけで，見向きもしないものもいた。



巧みにわらをしごいて食べるゾウ。

結局，２か月間のテストのすえ，人工飼料は「ノー」の結論がでた。

逆に人工飼料を用いて成功したのは，草食獣の場合である。

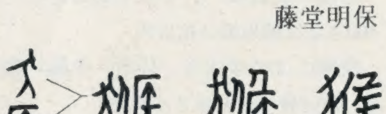
草食性の動物，とくにいつも口をもぐもぐさせている反芻（はんすう）動物には，つねに食料をそばに用意しておかなければならないが，青草などは長時間放置しておくと腐敗することが多く，こうした動物の欲求を満たすことができない。

そこで考案されたのが，切りわら，イモ，ニンジンなどと，人工飼料を練り固めた固型飼料である。これなら腐敗の心配もないし，草食獣の味覚は鈍いので，栄養価さえ気をつければいつでも使用できるわけだ。

今後は濃厚飼料（ふすま，イモ，ニンジン）や，粗飼料（草，わら）などとまぜて，さらに利用されることだろう。動物の食事にも，インスタント時代がきたわけだ。■

漢字のふるさと 2

藤堂明保



猴（こう）　猿とともに，猴もまたサルの総称である。しかしこれは，背をまるくかがめるサルの姿に着目した呼び名であった。

矦という字は，もと「厂」＋「矢」からなり，厂の型のたれ幕，またはついたてのかげから，矢を射ることを表わした字である。だから人べんをそえた侯（侯人ともいう）とは，矢を射る衛士のことであった。ところが射手は，必ず背をかがめて，物かげからマトをねらうものだ。そこでかしこまって主人のようすをうかがうことを「伺候する」という。

猴とは，獲物をうかがう射手のように，背をまるくかがめている動物，という意味である。だから日本で「ネコ背」というところを，中国では猴背（サル背）という。シラミをとるサルの姿を思いださせるユーモラスな名称である。■

田中光常

動物写真のポイント

4. 野生動物

時間をかけてゆっくり近づけ



雄ジカ（金華山）

35ミリカメラ
レンズ 600ミリ
フィルム SSS
F5.6 1/125

どんな動物でもそうだが，とくに野生の動物は神経質である。少しでも大きく写したければ，望遠レンズで，しかも接近せざるを得ない。その際には動物に気づかれぬよう，恐れさせぬように近づくことがたいせつである。

哺乳（ほにゅう）動物でも鳥類でも，ある一定の距離までは，かれらにとって安全だという距離があるらしい。それ以上に近寄るには，よほどの技術が必要である。いわば動物カメラマンは忍者の極意を体得しておかねばならない。あわてては事を仕損じること請け合いで，せっかくの苦労も徒労に帰すことが多い。眠っているときとか，えさを食べているとき，よそ見をしているときなどに1歩1歩と近寄り，いつ逃げられても，その手前までは撮影済みにしておかなければならない。

せっかく近づいたのに，望遠レンズの最短撮影距離内にはいってしまってピントが合わなくなり，再び離れて写したこともあったが，要は相手の動物を恐れさせないことである。■

創刊記念〈愛育の記〉募集

動物の飼育，観察をはじめ，人と動物との交流の記録などを募集します。

形式は自由ですが，400字詰原稿用紙30枚程度にまとめてください。

1. 個人の部（共同研究などをふくむ）
A小学生 B中学生 最優秀作各1編・奨学金（各10万円）優秀作各5編・奨学金（各2万円）C一般 最優秀作1編10万円 優秀作5編・各2万円。

2. 学校の部 A小学校 B中学校 最優秀各1校・理科用具（各20万円相当）優秀各5校・理科用具（各5万円相当）

▶締切り・応募方法 昭和46年12月31日必着。第1ページに住所，氏名（学校の部は学校名と指導教論名）を明記。

▶問合せと送り先

朝日新聞社「世界動物百科」愛育の記係

原稿募集

読者の研究——動物の採集，分布，飼育，観察などの研究報告。

仲間のひろば——本誌への要望，動物界への意見，主張。または自然保護に関する各地の現況，対策など。

動物ニュース——学会，同好会，動物施設，飼育などに関する珍しいニュース。

ペット相談室——ペットの飼育法，病気，購入などに関する質問。

動物写真——あなたが撮影したもの，または秘蔵の動物写真。

原稿の枚数は，いずれも原則として400字詰原稿用紙2枚以内。

原稿には必ず住所，氏名，年齢，職業，電話番号をお書きください。

採用分には薄謝または記念品を進呈いたします。なお，お送りくださった原稿，写真はお返しいたしません。

送り先は，
東京都千代田区有楽町2-3（〒100）
朝日新聞東京本社
「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係

ペット相談室



担当
前川 博司
（日本動物愛護協会附属動物病院院長）

〈問〉 生後8か月の雄ネコですが，最近外出することが多くなり，先日も4日ほど姿を見せず，やっと帰ってきたと思ったらそれ以後食欲がなく，目と頭の片側がはれているのです。どうしたのでしょうか。（東京都・渡辺睦美）

〈答〉 雄ネコの8か月といえば，いわば青年ネコです。春の発情した雌ネコを追って外泊するのも，無理のない生理的行動です。

雄には特別の発情期はありませんが，発情した雌が近くにいると，それに刺激されて性的行動を起こすのです。

あなたのネコも，こうした雌に近づこうとしたのでしょうが，恋敵の先輩ボス雄ネコが急に襲いかかってきたのを迎え撃つには力が足りず，つめと牙で頭とほおを傷つけられたものと思われます。深い毛に隠れて，その傷はなまなましく残っているはずです。

傷ついてから2，3日すると化膿し，はれあがります。熱も出るし，元気も食欲もなくなり，まして恋心など吹きとんでしまい，しょぼしょぼすみかに帰ってきたのでしょう。

化膿の場所が浅ければ，3,4日後にひとりでに皮膚が破れて膿がで，その傷も1週間ぐらいで自然になおるものです。

深い場所で化膿を起こすと，顔全体がはれあがり，目の結膜にも炎症がひろがり，血の涙が出ることもあります。やがてほおの一部とか口の内側に開穴して，膿が流れでますが，膿がつねに流れだしてなおらなくなることもしばしばです。

化膿がある程度まで進んだとき切開して，膿をじゅうぶん出して傷のなかを薬で洗い流してやれば数日でなおります。

ネコの恋もはために風流ですが，こうした実害を受けることがあるので油断できません。雄どうしのけんか傷や，恋に気をとられて，自動車にはねられるネコが多くなるのも春先です。飼い主はよく注意して，野放しにしないようにしてください。■

〈問〉 生後4か月の子イヌを育てていますが，しきりにあと足で頭をかいています。皮膚には異常なく，元気もあり，食欲もふつうです。（埼玉県・海保美津江）

〈答〉 皮膚に特別の変化がなく，頭や耳のつけ根をかゆがるのはほとんど耳の病気です。

耳の穴をよく見てください。耳だれのような分泌物や膿がたまっているのは外耳炎です。イヌも人と同じように耳あかがたまりますが，これが湿っていて多いときに，細菌やかびが繁殖して炎症を起こし外耳炎になります。

アレルギー体質のイヌは，耳穴に湿疹ができ，炎症が始まり，外耳炎になります。

耳穴にだけ好んで寄生する耳疥癬というダニの種類がいます。寄生性外耳炎というのは，この寄生を受けたもので，耳穴がかゆくて1日じゅう耳や頭をかいています。耳穴に黒っぽいかわいた耳あかがいっぱいつまっていて，このあかを虫めがねで見ると小さなクモのような虫が動いているのがわかります。

この虫は耳穴にだけ生息し，他の皮膚には寄生できません。からだの皮膚につく疥癬とはまったく別のものですが，イヌにはうつります。

春は外耳炎の多発する時期で，早くなおさないと慢性になりやすく，一生耳に悩まされることになります。

外耳炎はイヌの体質に関係が深く，耳に水がはいっただけで，この病気になることはきわめてまれです。耳疥癬に原因するとき以外は，外からの原因より，むしろイヌ自体の耳穴の皮膚に問題があることが多いようです。

外耳炎の治療は，やさしいようでむずかしく，こじらせると専門家も困るものです。耳の穴をむやみに綿棒などでつっつかないように注意してください。耳穴の皮膚は柔らかいので，さわることで傷つけて，悪化させることが多いからです。

治療は，抗生物質，消炎剤，鎮痒剤，殺虫剤などが混合された耳用の薬を使用します。薬で耳あかを洗い流すような要領で，柔らかく，気長にすることがたいせつです。耳内は神経も過敏ですから，痛がらせると，次の治療をいやがるようになります。専門医にまかせるほうがよいでしょう。■

裏表紙説明

この美しい鳥は，オオルリに近縁なヒタキの一種である。ヒタキ類はツグミ類やウグイス類に近いグループで，旧世界からオセアニアにかけて広く分布している。この類は昆虫食で，典型的には，見晴らしのよい枝に止まっていて，飛んできた虫に突進して捕え，またもとの枝にもどる，という捕食方法を特徴とする。

日本ではオオルリ，キビタキなどの美しい鳥がこの類の代表者で，鳴き声も非常に美しい。ヒタキ類はすべて森林，または疎林にすみ，日本をふくめて温帯，寒帯で繁殖するものは，すべて冬には熱帯へ渡る。■ （浦本昌紀）

PH. JOHN MARKHAM



ジャン・シメオン・シャルダン **猿の画家** (1739年ころの作) 油彩 カンバス 73×59センチ ルーヴル美術館蔵

猿の画家

見てすぐわかるとおり，たいへんユーモラスな印象の作品である。画家のアトリエの中で，1匹の猿(さる)が真面目(まじめ)な顔をして，絵を描いている。アトリエの様子は，主人公の猿だけを別にすれば，18世紀の当時の仕事場を彷彿(ほうふつ)とさせるような，リアルな筆致で描かれている。スケッチを入れた紙ばさみや，デッサン練習用の彫像，筆を洗うための水を入れた皿，水差しなどは，静物画家シャルダンにふさわしい迫真的な描写力で描かれている。

いや，画面の主人公である画家（？）も，その服装や手にした道具は，当時の画家のものそのままである。画面のこまかいところに筆を入れる際，手がカンバスに触れないように支(さ)さえにする腕枕(わんちん)まで，ちゃんと実際と同じように描きだされている。その腕枕に手をかけて，いかにももっともらしく筆を構えながら，まるで描かれるのを意識しているように，ちょっとポーズを作って，われわれ観客の方を向いている猿の姿が，周囲の道具立てが写実的であるだけに，いっそう見る者の微笑を誘うのである。

18世紀のフランスが生んだ，最大の画家のひとりシャルダン（1699—1779）は，静物画家，肖像画家，風俗画家として知られている。ということは，彼の描きだす世界が，もっぱら現実のありのままの姿だということである。そのような偉大な観察者であったシャルダンに，このようなちょっぴり皮肉をきかせた動物画があるのは，大変興味深い。■

（高階秀爾）

世界動物百科 通巻4号 昭和46年4月4日発行（毎日曜日発行） 編集・発行人 大田信男 発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋 印刷・凸版印刷 **定価220円**



雑誌コード 0631